

狭山市埋蔵文化財調査報告書7

小山ノ上遺跡2次～5次

宮ノ越遺跡2次

中原遺跡

揚植木遺跡7次・9次

御所の内遺跡3次

1988

埼玉県狭山市教育委員会

狭山市埋蔵文化財調査報告書 7

小山ノ上遺跡 2次～5次
宮ノ越遺跡 2次
中原遺跡
揚櫃木遺跡 7次・9次
御所の内遺跡 3次

1988

埼玉県狭山市教育委員会

序

狭山市は、関東平野のほぼ中央に位置し、埼玉県西南部に当たる武蔵野丘陵地帯にあります。

地形的には、名栗村から発して荒川に注ぐ入間川が市域の中央やや北寄りを通流し、市街地を二分して河岸段丘を形成しています。この河岸段丘上は、おおむね平坦地で畑地と武蔵野の平地林で形成されており、遺跡公布調査の結果66か所の遺跡の所在が確認されています。

昭和50年代に入り、開発に伴う宅地造成等が遺跡の所在地に多くなってきたことに対応して、遺跡の保護のために発掘調査を行って記録保存を実施しているところです。

本書は、昭和60・61年度に発掘調査を実施した遺跡9か所の記録保存の報告書です。ここに、その成果を明らかにして広く市民各位及び研究者のご指導、ご助言を仰ぐ次第です。

最後に、各遺跡調査をご快諾いただいた土地所有者、地元関係者各位に対して厚くお礼申し上げます。

狭山市教育委員会

教育長 武居 富雄

例 言

1. 本書は、昭和60・61年度の埼玉県狭山市北部遺跡群内における個人住宅等の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 調査に伴う諸経費は、国及び県の補助により年度総額2,000,000円である。
3. 調査及び整理期間は、昭和60年度が昭和60年7月22日から昭和61年2月28日まで、昭和61年度が昭和61年5月2日から昭和62年2月5日までである。
4. 各調査の文化庁通知は、以下の通りである。

小山ノ上遺跡2次	昭和61年3月3日付	61委保記2-616号
小山ノ上遺跡3次	昭和61年1月22日付	61委保記2-542号
小山ノ上遺跡4次	昭和61年10月14日付	61委保記2-3287号
小山ノ上遺跡5次	昭和62年3月17日付	61委保記2-619号
宮ノ越遺跡2次	昭和61年3月26日付	61委保記2-1198号
中原遺跡	昭和60年12月18日付	60委保記2-3384号
揚櫃木遺跡7次	昭和60年12月18日付	60委保記2-3409号
揚櫃木遺跡9次	昭和62年6月2日付	62委保記2-1261号
御所の内遺跡3次	昭和61年3月26日付	61委保記2-1263号
5. 発掘調査は、狭山市教育委員会が主体となり、小淵良樹が担当した。
6. 本書の執筆は、調査担当者が行い、版図の作成及び遺構・遺物の写真撮影は、担当者と今井正美・犬竹幸喜・宮野将仁が行った。
7. 本書の作成は、狭山市教育委員会社会教育課で行った。
8. 発掘調査、報告にあたっては下記のみなさま方から有益な御指導・御教示を承りました。記して謝意を表する。

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 飯田充晴 曾根原裕明 高橋一夫 立石盛詞 中村会司 仲山英樹 坂野和信 益岡孝次 大和 修 田無清彦

調査員

今井正美

調査協力員

秋葉恒章、池田福子、大竹幸喜、今坂友生、内田静江、大野良雄、金子ハル子、木谷 雪、小林正明、桜井ハル、田口文枝、田中きみ子、田中トキ、千葉信也、豊泉貞次、西 幸子、平山 勝、福井乙女、船木晃江、星野とり、堀美知子、宮野将仁、諸井芳子、矢島 勇、山岸義造、山本とし子、山本喜純、吉野博明、渡辺滝治

整理協力員

犬竹幸喜、今坂友生、甲田善徳、齊藤通子、竹内千代子、平山 勝、福永弘幸、三浦良子、木村弘子、宮野将仁、山川淑恵、山崎 誠、山崎好子、吉野博明

目 次

序

例 言

目 次

挿図目次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 狭山市及び周辺遺跡の立地と環境	1
第3章 小山ノ上遺跡2～5次の調査	5
第1節 調査経過	5
第2節 遺跡の概要	8
第3節 遺構と遺物	10
第4章 宮ノ越遺跡2次の調査	56
第1節 調査経過	56
第2節 遺跡の概要	58
第3節 遺構と遺物	58
第5章 中原遺跡の調査	64
第1節 調査経過	64
第2節 遺跡の概要	64
第3節 遺構と遺物	66
第6章 揚楡木遺跡7・9次の調査	67
第1節 調査経過	67
第2節 遺跡の概要	68
第3節 遺構と遺物	69
第7章 御所の内遺跡3次の調査	70
第1節 調査経過	70
第2節 遺跡の概要	71
第3節 遺構と遺物	71
第8章 結 語	72

挿 図 目 次

- 第1図 狭山市及び周辺の遺跡図(1/50,000)
第2図 小山ノ上遺跡周辺地形図(1/5,000)
第3図 小山ノ上遺跡2・4・5次全測図(1/500)
第4図 小山ノ上遺跡3次全測図(1/300)
第5図 第1号掘立柱建物跡(1/60・1/30)
2次
第6図 第1号住居跡(1/60)3次
第7図 第1号住居跡出土遺物①(1/3)3次
第8図 第1号住居跡出土遺物②(1/3)3次
第9図 第2号住居跡遺物出土状態図(1/60)
第10図 第2号住居跡(1/60)
第11図 第2号住居跡出土遺物①(1/3)3次
第12図 第2号住居跡出土遺物②(1/3)3次
第13図 第2号住居跡出土遺物③(1/3)3次
第14図 第3号住居跡(1/60)3次
第15図 第3号住居跡カマド(1/30)3次
第16図 第3号住居跡出土遺物(1/3)3次
第17図 4次調査区土層図(1/120)
第18図 4次調査区掘立柱建物跡配置図
(1/200)
第19図 第2号掘立柱建物跡①(1/60)
第20図 第2号掘立柱建物跡②(1/60)4次
第21図 第3号掘立柱建物跡(1/60・1/30)
第22図 第4号住居跡、第4・5号掘立柱建
物跡(1/60・1/30)
第23図 5次調査区掘立柱建物跡配置図
(1/200)
第24図 第6号掘立柱建物跡①(1/60)5次
第25図 第6号掘立柱建物跡②(1/30)5次
第26図 第7・9・10号掘立柱建物跡(1/60)5次
第27図 第7号掘立柱建物跡(1/60・1/30)
5次
第28図 第8号掘立柱建物跡(1/60)5次
第29図 第9号掘立柱建物跡(1/60)5次
第30図 第10号掘立柱建物跡(1/60・1/30)
5次
第31図 掘立柱建物跡出土遺物(1/3)
第32図 堀跡(1/80)5次
第33図 堀跡出土遺物①(1/3)5次
第34図 堀跡出土遺物②(1/3)5次
第35図 堀跡出土遺物③(1/3)5次
第36図 集石(1/30)5次
第37図 集石出土遺物(1/3)5次
第38図 木・鉄製品(1/2)
第39図 表土出土遺物(1/3)
第40図 宮ノ越遺跡周辺地形図(1/5,000)
第41図 宮ノ越遺跡2次全測図(1/300)
第42図 第66号住居跡(1/60)
第43図 第66号住居跡カマド(1/30)
第44図 第66号住居跡出土遺物(1/3)
第45図 第19号掘立柱建物跡(1/60)
第46図 鉄製品(1/2)
第47図 表土出土遺物(1/3)
第48図 中原遺跡周辺地形図(1/5,000)
第49図 中原遺跡全測図(1/300)
第50図 土壇(1/60)
第51図 揚楯木遺跡周辺地形図(1/5,000)
第52図 揚楯木遺跡7次全測図(1/300)
第53図 揚楯木遺跡9次全測図(1/300)
第54図 御所の内遺跡周辺地形図(1/5,000)
第55図 御所の内遺跡3次全測図(1/300)
付 図 小山ノ上遺跡全体測量図(1/800)

- 図版20 木・金属製品
- 図版21 宮ノ越遺跡 2次調査
第66号住居跡
- 図版22 第66号住居跡カマド・入口
第19号掘立柱建物跡
- 図版23 第66号住居跡出土遺物
- 図版24 表土出土遺物
- 図版25 中原遺跡全景
第1号土壇
第2号土壇
第3号土壇
- 図版26 揚植木遺跡 7次調査
- 図版27 揚植木遺跡 9次調査
- 図版28 御所の内遺跡 3次調査

図版目次

- 図版1 小山ノ上遺跡2次調査
第1号掘立柱建物跡柱痕検出状態
- 図版2 第1号掘立柱建物跡
第1号住居跡
- 図版3 第2号住居跡
第3号住居跡
- 図版4 小山ノ上遺跡4次調査区全景
- 図版5 第2号掘立柱建物跡柱痕検出状態
第2号掘立柱建物跡
- 図版6 第3号掘立柱建物跡
第4・5号掘立柱建物跡柱痕検出状
態
第4・5号掘立柱建物跡・第4号住
居跡
- 図版7 小山ノ上遺跡5次調査
- 図版8 第6号掘立柱建物跡柱痕検出状態

- 第6号掘立柱建物跡
- 図版9 第7号掘立柱建物跡
第8号掘立柱建物跡
- 図版10 第9・10号掘立柱建物跡
- 図版11 堀跡調査状況
- 図版12 集石
第1号住居跡出土遺物
- 図版13 第1号住居跡出土瓦
第2号住居跡出土遺物
- 図版15 第2号住居跡出土遺物
- 図版16 第2号住居跡出土瓦
- 図版17 第3号住居跡出土遺物
堀跡出土遺物
- 図版18 掘立柱建物跡出土遺物
表土出土遺物
墨書土器
- 図版19 堀跡出土遺物



第1章 発掘調査に至る経過

狹山市は、埼玉県南部に位置しており、東京の新宿副都心から1時間以内の通勤圏にある。近年においては、東京のベッドタウンとして宅地造成が進み、年毎の人口増加率も著しいのびを示している。

市教育委員会では、昭和57年度に遺跡の詳細分布調査を実施して遺跡地図・地番表等の台帳を作成し、昭和58年度からは開発に伴う埋蔵文化財の破壊に対処するために、事前に記録保存のための発掘調査を実施している。

本調査報告書は、昭和60・61年度に実施した開発行為に先立つ9か所の発掘調査報告書である。遺跡名、所在地、事業者名、調査面積、調査期間は下表のとおりである。

この調査に至る経過は、農業委員会事務局から農地転用許可申請段階、また建設部建築指導課から開発事前協議、建築確認等の申請段階で教育委員会がチェックをして遺跡台帳と照合のうえ現地調査を実施して遺跡の状況を確認する。そこで工事主体者（事業者）に連絡して協議をする。その結果、教育委員会が発掘調査の主体者となって記録保存を実施することとなった。

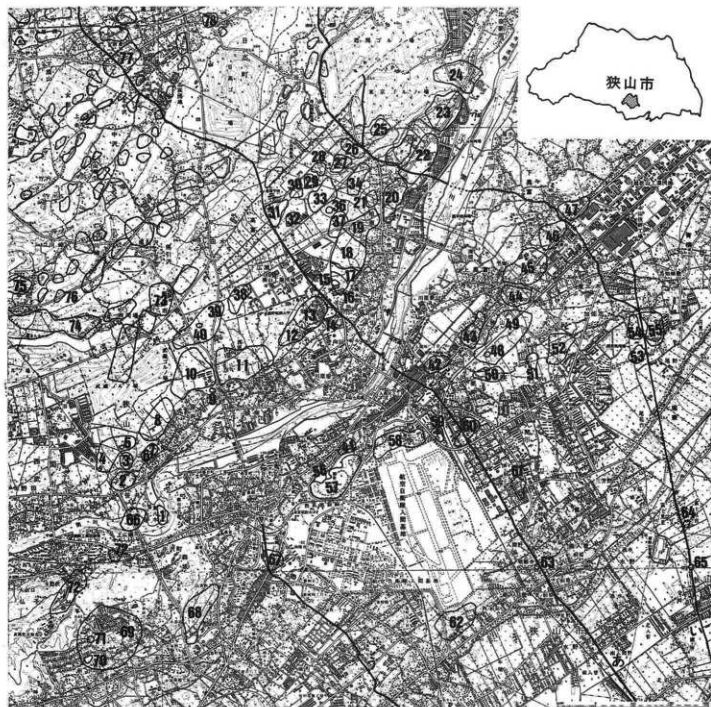
	遺跡名	所在地	事業者	面積	調査期間
1	揚楯木遺跡 7次	狹山市大字上奥富字下大海道46-11	松井 春江氏	297 m ²	60年8月12日～8月19日
2	中原遺跡	狹山市入間川字中原735	粕谷仁一郎氏	677 m ²	60年9月9日～9月17日
3	小山ノ上遺跡2次	狹山市柏原字英1491-8	神田 英作氏	999 m ²	60年10月29日～11月29日
4	小山ノ上遺跡3次	狹山市柏原字下並木1282-3	神田 幸兵氏	999 m ²	60年11月12日～12月17日
5	宮ノ越遺跡 2次	狹山市柏原字宮原3658-5	高橋 たけ氏	330 m ²	60年12月18日～61年1月18日
6	御所の内遺跡3次	狹山市柏原字御所の内2465-2	久保田ふく氏	165 m ²	61年1月11日～1月14日
7	小山ノ上遺跡4次	狹山市柏原字英1491-1	神田 力三氏	780 m ²	61年5月2日～5月15日
8	小山ノ上遺跡5次	狹山市柏原字小山ノ上1226-1	早川 吉三氏	306 m ²	61年12月10日～62年1月22日
9	揚楯木遺跡 9次	狹山市大字上奥富字平塚276-1	志村 ゆわ氏	480.3m ²	62年2月4日～2月5日

第2章 狹山市及び周辺遺跡の立地と環境

狹山市は、埼玉県南西部に位置する人口15万人の都市である。主要交通路は、鉄道では西武新宿線と西武池袋線、道路では国道16号線と国道299号線がある。市の主要産業は農業であったが、昭和37年に川越・狹山工業団地、昭和46年に狹山工業団地が造成され、現在では工業製品出荷額が埼玉県第1位をはこる工業都市となっている。このなかで、東京環状線として機能している国道16号線が重要な位置を占めている。また、副都心新宿に約50分で行ける利便さは、東京方面への通勤圏として住宅適地となり、都市化現象もみられる。

遺跡名		遺跡名		遺跡名	
1	東八木塚跡群 (22049)	29	上の原西遺跡 (22063)	57	稲荷山公園遺跡 (22051)
2	八木遺跡 (22068)	30	半貫山遺跡 (22061)	58	石無取遺跡 (22083)
3	八木北遺跡 (22021)	31	稲荷山遺跡 (22058)	59	富士見西遺跡 (22082)
4	八木上遺跡 (22022)	32	前山遺跡 (22059)	60	富士見北遺跡 (22072)
5	沢口上古墳 (22020)	33	高根遺跡 (22062)	61	富士見南遺跡 (22081)
6	笹井古墳群 (22019)	34	町久保遺跡 (22034)	62	町屋道遺跡 (22088)
7	沢口遺跡 (22080)	35	宮塚遺跡 (22017)	63	七曲井 (22046)
8	宮地遺跡 (22018)	36	下双木遺跡 (22078)	64	堀兼之井 (22047)
9	金井遺跡 (22071)	37	上双木遺跡 (22077)	65	八軒家の井 (22076)
10	金井上遺跡 (22023)	38	上広瀬西久保遺跡(22073)	66	八木前遺跡 (22087)
11	上広瀬上ノ原遺跡(22005)	39	東久保遺跡 (22070)	67	金堀沢遺跡 (入間市)
12	霞ヶ丘遺跡 (22004)	40	西久保遺跡 (22069)	68	坂東山遺跡 (入間市)
13	今宿遺跡 (22002)	41	上課訪遺跡 (22086)	69	東金子塚跡群 (入間市)
14	上広瀬古墳群 (22001)	42	滝紙園遺跡 (22066)	70	新久塚跡群 (入間市)
15	森ノ上西遺跡 (22079)	43	峰遺跡 (22024)	71	八坂前塚跡群 (入間市)
16	森ノ上遺跡 (22008)	44	戸張遺跡 (22026)	72	宮内出塚跡群 (入間市)
17	富士塚遺跡 (22009)	45	揚楯木遺跡 (22027)	73	芦刈場遺跡 (飯能市)
18	鳥ノ上遺跡 (22010)	46	坂上遺跡 (22029)	74	張摩久保遺跡 (飯能市)
19	小山ノ上遺跡 (22011)	47	稲荷上遺跡 (22032)	75	中原遺跡 (飯能市)
20	御所の内遺跡 (22012)	48	上中原遺跡 (22089)	76	ヤタリ遺跡 (飯能市)
21	英遺跡 (22074)	49	中原遺跡 (22025)	77	若宮遺跡 (女影庵寺を含む) (日高町)
22	城ノ越遺跡 (22013)	50	沢台遺跡 (22079)	78	宿東遺跡 (日高町)
23	宮ノ越遺跡 (22016)	51	沢久保遺跡 (22041)	あ	鎌倉街道上道 (本道)
24	字尻遺跡 (22075)	52	下向沢遺跡 (22042)	い	鎌倉街道上道 (堀兼道)
25	丸山遺跡 (22037)	53	吉原遺跡 (22067)	う	鎌倉街道上道枝道
26	金井林遺跡 (22035)	54	下向遺跡 (22085)		
27	鶴田遺跡 (22044)	55	台遺跡 (22085)		
28	上の原東遺跡 (22065)	56	稲荷山公園古墳群(22052)		

図中における日高町所在の遺跡は『日高町遺跡分布調査報告書』(1980)に、飯能市所在の遺跡は『飯能市遺跡分布地図』(1983)・『飯能 遺跡(1)』(1984)によった。なお鎌倉街道上道の筋道は埼玉県教育委員会『鎌倉街道上道』において推定されたものを記載した。



第1図 狭山市及び周辺の遺跡図 (1/50,000)

〈立地〉

埼玉県の地形は、西部の山岳地から順次標高を下げ、武蔵野台地等を経て東部の低地へと続く。中央部の台地は、山地から流れたす中小河川によって浸蝕され、多くの河岸段丘を形成している。入間川もその一つで、市内では武蔵野台地を開析して南部の狭山市街地をのせる段丘（武蔵野台地）と、北部の広瀬・柏原地区等をのせる段丘（入間台地）を形成している。入間川の流れは、南西から北東に向いており、水富地区から開析谷の幅を除々に広げ、川越市の落合橋付近で南東流してくる越辺川と合流する。河岸段丘は南側で3段、北側では2段であり、上流の笹井では3段となっている。

狭山市南部では、入間川とおおむね同方向に流れる不老川に開析された地形を呈しているが、その川は冬の湛水期には流れがなくなり、開析の度合は進んでいない。

段丘上は、ほぼ平坦であるが微地形は複雑で、入間川の流れと同方向に埋没谷がいくつかみられる。段丘崖は急傾斜を呈し、清水が認められる所もいくつかある。遺跡は、各時代を通じてこの段丘崖に沿って認められる。

〈狭山の遺跡〉

当市には、66か所の遺跡が存在する。時代別の遺跡数は、旧石器時代4、縄文時代44、古墳時代6、奈良・平安時代41である。遺跡の大半は、入間川の両岸段丘上に立地する（増田 他 1986）。右岸は、入間川町の市街地をのせる段と入間基地をのせる段の2段に遺跡が存在し、左岸は笹井地区では3段に存在し、他は最上段に立地する。入間川流域以外では、左岸段丘の奥にある智光山公園を水源とする小河川の両岸に11遺跡が集中している。遺跡の時代別立地状況の特色は、特に認められない。次に各時代について概観する。

旧石器時代

遺物は、表採資料で数点発見されている。森ノ上西⑮・上中原⑯の両遺跡では、ナイフ形石器が発見されている。

縄文時代

時期別では、草創期2、早期3、前期19、中期37、後期16、晩期0である。草創期は、上広瀬上ノ原⑰・下並木⑱の両遺跡で尖頭器が発見されている。早期は、昭和44年に調査が実施された今宿遺跡⑲（小淵 1987）で茅山式期の野外器が発見されている。前期は、昭和56年調査を実施した揚植木遺跡⑳で、黒浜期の住居跡を9軒検出し、多量の土器と石器が出土した。中期は、前期の揚植木遺跡と昭和46・56年に調査を実施した宮地遺跡㉑で住居跡61軒と敷石住居跡3軒、土坑多数を検出し、昭和61年に調査を実施した森ノ上遺跡㉒で住居跡2軒と敷石住居跡4軒を検出した。宮地遺跡では、晩期から加曽利EⅣ期までの時期があり、環状集落を呈している。後期は、高根遺跡㉓の調査で堰之内期の包含層を検出し、多量の土器が出土している。

古墳時代

古墳群3か所と集落跡が確認されている。昭和56年に調査を実施した滝紙園遺跡㉔（小河 1983）では、後期の鬼高期に属する住居跡を1軒検出している。古墳は、昭和53年の笹井古墳群の調査で半地下式構造を呈するものが1基検出されている。他にも、上広瀬古墳群㉕・福寿山公園古墳群㉖

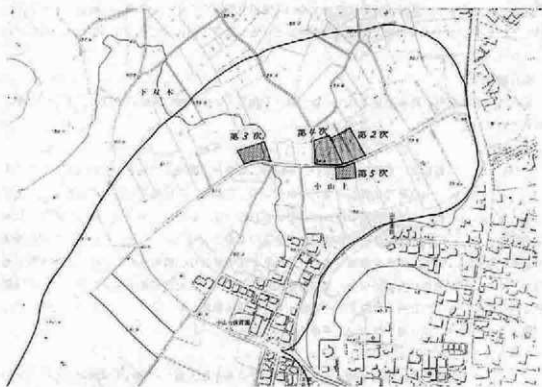
で工事等で半地下式構造の古墳が発見されている。

奈良・平安時代

この時代は、狹山市で特に遺跡が多いところで、入間川の兩岸台地上は当該期の遺跡がほとんどである。調査した遺跡も多く、宮地・上広瀬上ノ原(小淵 1985)・今宿・森ノ上・富士塚⑦・小山ノ上⑩・城ノ越②(増田 1978, 小淵 1985)・宮ノ越③(駒見 1982)・揚徳木(小淵 1986)・稲荷上⑧の10遺跡ある。検出した遺構は、竪穴住居跡が254軒、掘立柱建物跡が55棟、墳墓6基である。

鎌倉時代以降

城柵関係では、入間川左岸に城山着跡(②の一部)が存在する。現在、土塁と堀に囲まれた一帯が遺存している。ここから上流1kmの地点に本書で報告する小山ノ上遺跡⑩で検出した堀が存在する。このほかには、武蔵野台地に特徴的に見られる深井戸が七曲井⑤・堀兼之井⑥・八軒家の井⑨の3基存在する。七曲井は、昭和45年に発掘調査を実施してルート状の掘り方と井桁を検出、多量の陶磁器が発見されている。これらの井戸は、埼玉県教育委員会が実施した歴史の道の調査で確認された鎌倉街道に隣接しており、この街道と密接な関係がうかがえる。街道は、3本の道筋(あーう)が確認されており、⑥は本道として、⑤は堀兼道として位置づけられている。④は、北が日高町女影村近を通り鳩山町今宿へ抜け、南は所沢市久米から東京都府中市へと抜けている。⑦は、所沢市内で④と分離して狹山市堀兼を通り、狹山市新狭山へと通じている。これらの道筋は、鎌倉時代以前の古道を整備したものともいわれており、奈良・平安時代の集落との関連が十分に考えられる。



第2図 小山ノ上遺跡周辺の地形図 (1/5,000)

第3章 小山ノ上遺跡2～5次の調査

第1節 調査経過

2次調査(昭和60年)

- 10月29日 調査開始。伐根した桑の木を除去してグリッドを設定。
- 10月30日 グリッドの掘削を開始。グリッドを4つに1つの割合で、第1列から掘り始める。(すー1)Gは、表土下1.3mでローム面を検出。
- 10月31日 グリッドの掘削。
- 11月5日 グリッドの掘削。当初予定していた掘削するグリッド数を、表土が厚く堆積しているために変更して8つに1つの割合にした。
- 11月11日 (すー14)Gで土器多数と焼土を検出。遺構の存在が予想されたので、周囲を拡張することに決定し、表土が厚いので重機(バックホー)を導入することにした。重機を導入するまでの間、3次調査を実施。
- 11月21日 重機を導入して(すー14)G周囲のグリッドを拡張。
- 11月24日 重機による拡張を終了。その結果、孤立柱建物跡を1棟検出した。
- 11月25日 遺構確認作業を実施。検出した遺構を、1号孤立柱建物跡と命名。
- 11月26日 1号孤立柱建物跡の調査。柱穴を切開して柱痕の検出につとめる。
- 11月27日 柱穴のセクション図作成後、全掘する。全体を精査して全景写真を撮影。
- 11月29日 平面図、エレベーション図、全測図を作成し、調査を終了した。

3次調査(昭和60年)

- 11月12日 調査区内を整備し、グリッドを設定。4つに1つの割合で掘削を開始。
- 11月13日 (すー7)Gで白色粘土を確認。(うー7)Gで住居跡と思われる遺構を検出。
- 11月16日 1列のグリッドを掘削。
- 11月18日 (おー1)Gで黒色土のプランを確認。ここから遺物が多数出土。
- 11月19日 (すー7)Gの周囲8グリッドを拡張。
- 11月20日 (すー7)G周囲のグリッドの拡張により住居跡を検出、これを1号住居跡とした。(うー7)G周囲の拡張により住居跡を検出。これを3号とした。(おーきー1)Gの周囲を拡張。その結果、住居跡を検出し、これを2号とした。
- 11月27日 2号住居跡のプラン確認。調査区域外にかかり検出した部分は半分程であった。
- 11月29日 1号住居跡の調査を開始。攪乱が著しく、遺存状態は悪い。住居跡を4分割して掘り下げた。床面上に多数の炭化材が遺存。
- 11月30日 2号住居跡の調査を開始。3分割して掘り下げ、上層から須恵器が多数出土。
- 12月4日 3号住居跡のプラン確認。その結果、調査区域外に一部がかかっていることが判明したため、隣接地の所有者に調査の了解を得て拡張を実施。
- 12月5日 3号住居跡の調査を開始。長方形プランで、4分割して掘り下げた。多量の焼土を検出。

- 12月6日 1号住居跡の炭化材を精査。
- 12月9日 2号住居跡の遺物出土状態図を作成、遺物を取りあげた。
- 12月12日 1号住居跡の炭化材出土状態図を作成、これを取りあげた。
- 12月13日 3号住居跡の床面を切開。その結果、新たに床面を検出。各住居跡の図面を作成。
- 12月16日 1号住居跡の各種図面を作成。全体測量を実施し、全景写真を撮影。
- 12月17日 調査器材を撤収して調査を終了。

4次調査(昭和61年)

- 5月2日 既に表土は除去されており、遺構確認をただちに実施する。その結果、掘立柱建物跡を3棟検出し、2～4号とした。
- 5月6日 各掘立柱建物跡の調査を開始。柱痕を検出したものは、ただちに平面図、セクション図を作成。
- 5月7日 2号掘立柱建物跡で柱痕を検出し、平面図を作成。3号掘立柱建物跡は、柱痕を検し得ず。4号掘立柱建物跡に重なって柱穴列を検出、5号掘立柱建物跡とする。あわせて住居跡を検出、4号住居跡とした。
- 5月10日 各掘立柱建物跡の柱穴セクション図を作成し全掘する。
- 5月13日 4号住居跡の調査。各掘立柱建物跡の精査、写真撮影を実施。
- 5月15日 各遺構の平面図、エレベーション図を作成。全景写真を撮影後、全体測量を実施して調査を終了。

5次調査(昭和61・62年)

- 12月10日 幅3mのトレンチを4本設定し、南から番号を付した。1トレンチの掘削を開始。
- 12月11日 1トレンチで、西隅に集石を検出。また中央から東にかけて広い部分で落ち込み検出。3トレンチの掘削、遺構確認作業を実施。
- 12月12日 3トレンチの掘削を終了。1・3トレンチ調査の結果、黒色土中に堀跡を検出。全掘することとし、2・4トレンチの掘削を決定。
- 12月13日 2トレンチの掘削。1トレンチの掘土が2トレンチ上の上のっているため、これの移動から実施する。
- 12月15日 2トレンチの掘削。集石の精査。
- 12月16日 2・4トレンチの掘削作業を継続。堀跡の形状等を把握するため、1トレンチに試掘トレンチを設定して掘り下げを開始。表土から1.8mのところ堀跡の西側壁を検出。
- 12月17日 2・4トレンチの掘削を継続。
- 12月18日 2・4トレンチの掘削を継続。堀跡の試掘トレンチの掘削を継続し、断面形状を確認。
- 12月20日 2・4トレンチの掘削を終了。堀跡のプランを確認して調査を実施。
- 12月22日 堀跡の調査を継続。
- 12月23日 堀跡の覆土上面から板碑の破片が多数出土。

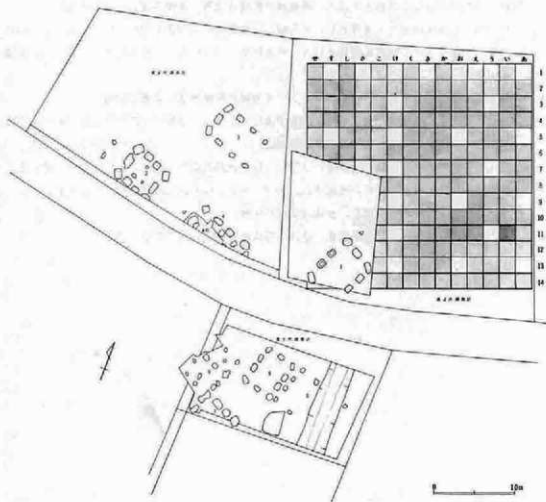
- 12月24日 堀跡の調査を継続。底面を確認。
- 12月25日 堀跡の調査を継続。斜面部の精査を実施し、セクション図を作成。
- 12月26日 堀跡の調査。冬休みに入るため遺構の保全作業を実施。
- 1月5日 保全シートを除去して、堀跡の調査。降雪のため途中で作業中止。
- 1月6日 BMを移動。
- 1月7日 除雪を実施後、堀跡の精査。
- 1月8日 堀跡の精査。セクションベルトを除去し、平面図・エレベーション図を作成。
- 1月9日 堀跡の全景写真を撮影して調査を終了。
- 1月10日 本日から奈良・平安時代の調査を開始。堀跡を確認した黒色土面を掘り下げて、遺構確認作業を実施。
- 1月12日 黒色土が厚く堆積しているため重機（バックホー）を導入して除去を実施。黒色土の除去が終了した地区から遺構確認。
- 1月14日 重機を導入して黒色土の除去。遺構確認作業の結果、4棟の掘立柱建物跡を検出。
- 1月16日 掘立柱建物跡を6-8号とし、6号掘立柱建物跡から調査を開始。柱穴の表面を3cmの深さで掘り下げて柱痕の確認を行う。その結果、どの柱穴でも柱痕を確認したので、平面図を作成し、写真を撮影。
- 1月17日 6号掘立柱建物跡の柱穴を切開。7・8号掘立柱建物跡の調査を開始。
- 1月19日 6号掘立柱建物跡のセクション図を作成し、全掘。7号掘立柱建物跡で柱痕を平面で確認し、平面図を作成。8号掘立柱建物跡は、ロームへの掘り込みが浅く遺存状態が不良。
- 1月20日 7・8号掘立柱建物跡を全掘。9号掘立柱建物跡の調査を始め、柱痕の検出に勉める。本跡の周囲に多数の柱穴が確認されたので、あと1棟の掘立柱建物跡があると思われる。
- 1月21日 各掘立柱建物跡を全掘し、全体測量図を作成。
- 1月22日 各掘立柱建物跡の図面を作成、全体の写真撮影を実施して調査を終了した。

第2節 遺跡の概要

遺跡は、西武新宿線狭山市駅から北西へ直線距離で、約2.5kmの地点に所在し、入間川左岸台地上の縁辺に位置している。標高は、西端が61m、東端が54mで、入間川沖積地との境は急崖を形成し、比高差は11mを測る。台地上はおおむね平坦で、北東に向けてゆるく傾斜して低くなっており、部分的に南から谷が入り込んでいる。

分布調査による遺跡の範囲は、480m×300m、面積にして101,000m²を測る。縄文時代中期・後期と奈良・平安時代の集落遺跡である。昭和60年9月から昭和61年7月にかけて、埼玉県埋蔵文化財調査事業団が築道建設に先立ち発掘調査を実施している。周辺で既に調査された遺跡としては、入間川の上流1.3kmに今宿遺跡、下流1.3kmに宮ノ越・城ノ越遺跡、対岸2.2kmに揚屋木遺跡がある。

2次調査区は、遺跡の中央やや東寄り、入間川に臨む台地端部から90m奥に入った所で、浅い谷の底に位置する。標高は57mを測り、北東側は小高くなっており比高差2mを測る。



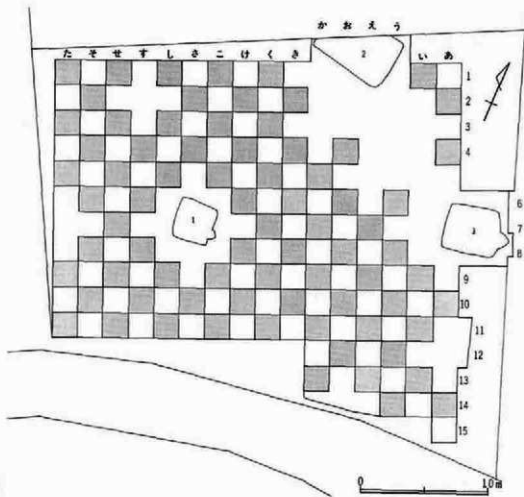
第3図 小山ノ上遺跡2・4・5次全測図 (1/500)

調査方法は、調査区が台形を呈し東西28m、南北28mの規模で、北東隅のクイを基点として2×2mのグリッドを196個設定し、手掘りで行った。グリッド名は、北東隅を基点として南に向けて数字、西に向けて五十音とし(○-○)Gで表わした。

調査の結果、掘立柱建物跡を1棟検出した。調査区が谷底のため表土層が厚く、ローム面まで南側が2m、北側で1.5mを測る。基本層序は、表土(耕作土)が80cm、黒色土が120cmでその下に漸移層、ロームとなっている。

3次調査区は、2次調査区から西に100m離れている。標高が60mで、2次調査区との比高差を3m測る。区域は、東西36m、南北26mの台形を呈しており、北東隅を基点として2×2mのグリッドを218個設定した。調査方法は、このグリッドを4つに1つの割合で掘削して遺構確認を行い、確認後は周囲のグリッドを拡張することとした。

調査の結果、竪穴住居跡を3軒検出した。基本土層は、表土(耕作土)が40cmあってローム面に達しており、耕作等の攪乱がひどくロームへの漸移層は認められなかった。



第4図 小山ノ上道跡3次全測図(1/300)

4次調査区は、2次調査区の西側に隣接しており、東西34m、南北27mの長方形を呈している。2次調査区と同様に浅い谷底に位置しており、西側が小高くなっている。表土層は、すでに除去されていてローム面まで露出している。ロームまでの深さは南東隅で1.8m、北隅で1.3mを測り、ローム面はかなりの傾斜地である。調査方法は、既に全面的表土が除去されているのでただちに遺構確認を実施した。

調査の結果、竪穴住居跡を1軒、掘立柱建物跡を4棟検出した。基本土層は、表土(耕作土)が110cm、黒色土が110cm、ロームへの漸移層が10cmでロームへ至る。

5次調査区は、2・4次調査区から南に2～3m離れている。2次調査区と同様に浅い谷の底に位置している。規模は東西22m、南北11mの長方形を呈している。調査方法は、昭和60年に埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した調査で検出された堀跡が、その向きから本調査区にのびている可能性があるためトレンチ調査として、幅3m、長さ15mのトレンチを4本設定した。

調査の結果、堀跡を1条、掘立柱建物跡を5棟検出した。基本土層は、表土(耕作土)が100cm、黒色土が120cm、漸移層10cmでロームへ至る。

第3節 遺構と遺物

2次調査

第1号掘立柱建物跡(第5図)

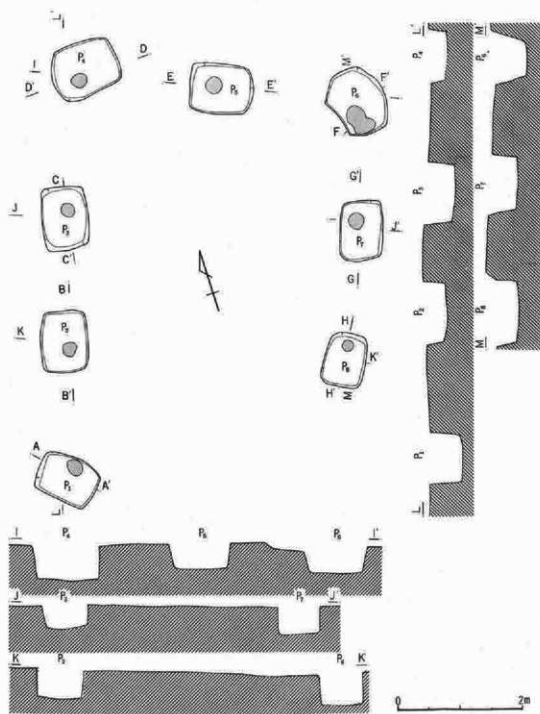
本跡は、調査区の西南端にて検出した。遺構の存在を認めたのは黒色土中で、焼土と遺物が検出された。しかし、明確なプランが判明せずローム面まで掘り下げて確認した。南側が調査区域外となり、一部分について確認できなかった。西に8m離れて、4次調査の第4号掘立柱建物跡が所在。

平面形態は、長方形を呈する。規模は東西2間(4.6m)、南北3間(7.5m)、推定面積34.5㎡を測る。主軸方位は、N-22°-Eを示す。柱穴は、南側梁行の2個の柱穴が区域外にかかり調査できず、8個検出した。柱穴プランは、P₆を除いて長方形を呈し、大きさはどれも同じような規模で平均75×100cmを測る。ローム面からの深さは、30～50cmである。どの柱穴からも、直径が18～30cmの柱痕が検出された。P₅では2個検出。柱痕の下層は、かたくつきかためてあった。柱穴間距離は、最小がP₂とP₃間で1m、最大がP₃とP₄間で1.35mを測る。柱痕間距離は、最小がP₆とP₇間で1.6m、最大がP₂とP₃間で2.2mを測る。

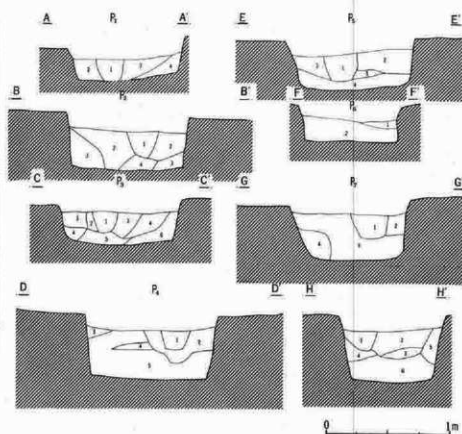
	形状	大きさ	深さ	その他		形状	大きさ	深さ	その他
P 1	長方形	100×70cm	30cm	柱痕径23cm	P 2	長方形	100×75cm	42cm	柱痕径23cm
P 3	長方形	100×75cm	35cm	柱痕径20cm	P 4	長方形	110×84cm	50cm	柱痕径25cm
P 5	長方形	100×80cm	40cm	柱痕径25cm	P 6	楕円形	110×80cm	30cm	柱痕径30cm
P 7	長方形	100×70cm	45cm	柱痕径25cm	P 8	長方形	80×70cm	50cm	柱痕径18cm

柱穴間・柱痕間距離は、P₁-P₂が1.3・1.87m、P₂-P₃が1・2.2m、P₃-P₄が1.35・2.05m、P₄-P₅が1.1・2.15m、P₅-P₆が1.15・2.2m、P₆-P₇が1.05・1.6m、P₇-P₈が1.15・2mをそれぞれ測る。

柱穴の向きは、柱穴列との向きに長軸をとっているが、各コーナーの柱穴は向きを40度ほどかえ



第5図 第1号孤立柱建物跡 (1/60・1/30)



第1号孤立柱建物跡柱穴土層注
P 1
第1層：暗褐色土、軟質（柱状）
第2層：黄褐色土、ロームと黒色土との混在する。第3層：黒褐色土、ローム粒子を含む。第4層：黒褐色土、ローム粒子、ロームブロックを多量に含む。
P 2
第1層：暗褐色土、軟質（柱状）
第2層：黒褐色土、ローム粒子を多く含む。しまりあり。第3層：黒褐色土、ロームブロックを含む。しまりあり。第4層：黄褐色土、ロームブロックに黒色を混じる。非常にしまりあり。
P 3
第1層：暗褐色土、軟質（柱状）
第2層：黄褐色土、ローム粒子を多量に含む。しまっている。第3層：黒褐色土、ロームブロックを含む。しまりあり。第4層：黒褐色土、ローム粒子を少し含む。第5層：黄褐色土、ローム粒子、ロームブロックを含む。非常にしまりあり。第6層：黒褐色土、ロームブロックを含む。
P 4
第1層：暗褐色土、軟質（柱状）
第2層：黒色土、ロームブロックを多く含む。しまりあり。第3層：黒褐色土、ロームブロックを含む。第4層：黒色土、軟質。第5層：黄褐色土、ロームブロック中に黒色土混在。非常にしまりあり。
P 5
第1層：暗褐色土、軟質（柱状）
第2層：黒褐色土、ローム粒子を含む。第3層：黒褐色土、ロームブロックを含む。第4層：黒褐色土、ローム粒子を多量に含む。非常にしまっている。
P 6
第1層：黒色土、軟質。第2層：黒褐色土、ロームブロックを多量に含む。しまりあり。
P 7
第1層：暗褐色土、軟質（柱状）
第2層：黒色土、軟質。第3層：黒褐色土、ロームブロックを含む。非常にしまっている。第4層：黒褐色土、ローム粒子を多量に含む。この層は、ブロック状である。
P 8
第1層：暗褐色土、軟質（柱状）
第2層：褐色土、ローム粒子を多く含む。しまっている。第3層：黒色土。第4層：黒色土、ロームブロックを含む。非常にしまっている。第5層：黒色土。第4層と同じ。第6層：黄褐色土、ロームブロック・黒色土の混在。非常にしまっている。

ている。

出土遺物 (第31図)

須恵器坏が出土している。

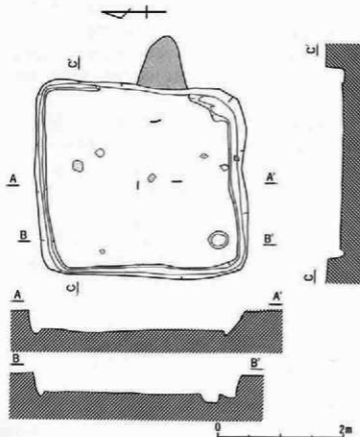
1. 須恵器坏 P: 出土 口縁部小破片。外面に墨書があり、「小山」と読める。胎土は、砂を多く含む。焼成は不良。色調は、灰色 (7.5Y5/1) を呈する。

3次調査

第1号住居跡 (第6図)

本跡は、調査区西側の(こ-7)Gにて検出した。耕作による攪乱がひどく、遺存状態は不良であった。北に15m離れて第2号住居跡、東に18m離れて第3号住居跡が所在する。

平面形態は、長方形を呈する。規模は東西3.00m、南北3.30mを測る。床面積は、約8.6㎡である。主軸方位は、N-92.5-Eを示す。壁体はほぼ垂直に立ち上がり、17-30cm遺存する。壁溝は、東壁の中央を除いて巡る。規模は幅17cm、深さ7cmを測る。床面は、耕作の攪乱によって凹凸があり軟弱となっている。柱穴は、南西コーナーに1つ検出された。



カマドは、東壁中央にて検出した。攪乱によって大破しており、詳細は不明である。

本跡は、火災にあったもので、床面上及び覆土から多量の炭化材・炭化物を検出した。

第6図 第1号住居跡 (1/60)

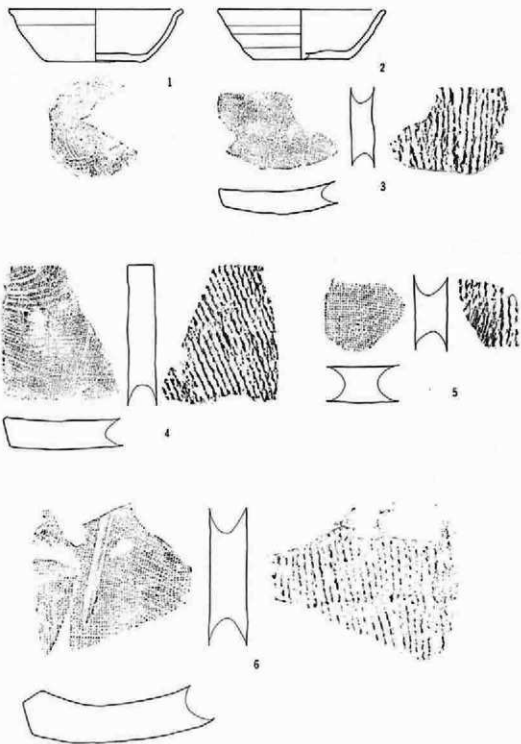
出土遺物 (第7・8・38図)

遺物は、須恵器坏、瓦、鉄製品刀子・鉾具・鉋尾・棒、木製品柄、炭化米が出土している。

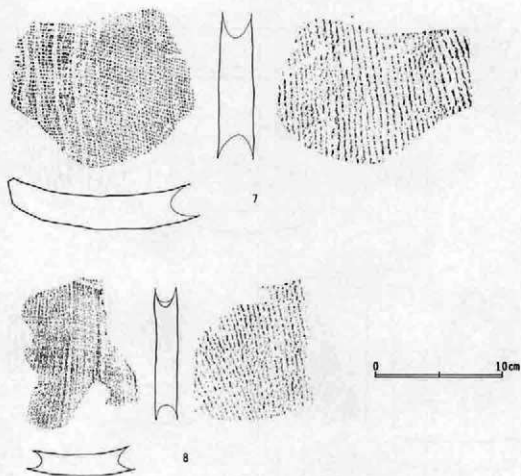
1. 須恵器坏 a区覆土出土。完存率65%。口径13.8cm、底径7.2cm、器高4.1cmを測る。口径・底径比は、0.52を示す。口縁部は外反する。水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。胎土は、5mm大の石を含む。焼成は良好。色調は、オリーブ灰色(5GY5/1)を呈する。
2. 須恵器坏 a区覆土出土。完存率25%。口径13.2cm、底径7.3cm、器高3.9cmを測る。口径・底径比は0.55を示す。体部は、外斜して立ち上がる。体部外面に墨書があるが判読はできず。水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。胎土は、5mm大の石を含む。焼成は良好。色調は、灰色(10Y5/1)を呈する。
3. 平瓦 覆土上層出土。破片。厚さ1.6cmを測る。外面は布目痕、内面は縄目痕を残す。側端部はへら整形。胎土は、5mm大の石を多く含む。焼成は良好。色調は、灰白色(7.5YR8/2)を呈する。
4. 平瓦 覆土出土。破片。厚さ2.2cmを測る。外面は布目痕、内面は縄目痕を残す。端部はへら整形を施す。胎土は、砂・4mm大の石を含む。焼成は良好。色調は、灰白色(7.5YR8/1)を呈する。
5. 平瓦 覆土下層出土。破片。厚さ2.9cmを測る。外面は布目痕、内面は縄目痕を残す。胎土は、8mm大の石・砂を含む。焼成は良好。色調は、灰白色(7.5YR8/4)を呈する。
6. 平瓦 覆土出土。破片。厚さ3cmを測る。外面は布目痕、内面は縄目痕を残す。側端部は、へらで削り落とされて、2つの面を作り出している。胎土は精良。焼成は良好。色調は、浅黄色(10YR8/3)を呈する。
7. 平瓦 覆土出土。破片。厚さ2.5cmを測る。外面は布目痕、内面は縄目痕を残す。側端部は、へら削り整形を施す。胎土は精良。焼成は良好。色調は、灰黄色(2.5Y6/2)を呈す。
8. 平瓦 覆土出土。破片。厚さ1.6cmを測る。外面は布目痕、内面は縄目痕を残す。胎土は、砂・5mm大の石を含む。焼成は良好。色調は、灰色(7.5Y6/1)を呈する。

金属製品 (第38図)

1. 鉾具 鉄製。完存率90%。長さ6.1cm、幅4.5cmを測る。遺存状態は不良である。No.6出土。
- 2・3. 鉋尾 鉄製。幅2.9cm、厚さ0.4cmを測る。断面は、片面が平坦で、片側がふくれている。遺存状態は良好である。覆土出土。
10. 棒 鉄製。長さ5.2cm、太さ0.5cmを測る。断面は矩形である。c区覆土出土。



第7图 第1号住居跡出土遺物 ① (1/3)



第8圖 第1号住居跡出土遺物 ② (1/3)

第2号住居跡(第9・10図)

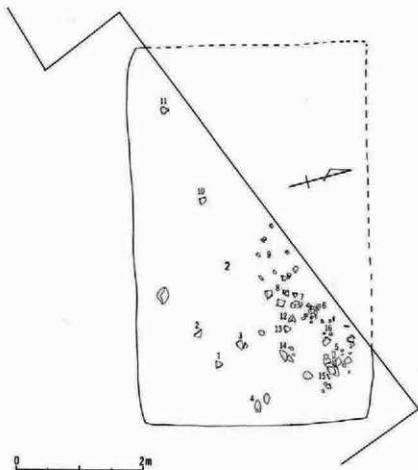
本跡は、調査区北端の(え-1)Gにて検出した。北側が調査区域外にかかり、半分程の調査となったが、3か所のコーナーを検出したので推定ではあるが全容が判明した。南に15m離れて第1号住居跡、南東に11m離れて第3号住居跡が存在する。

平面形態は、長方形を呈する。規模は東西5.94m、南北3.74m、床面積(推定)22.2㎡を測る。主軸方位は、N-12°-Eを示す。壁体は、斜めに立ち上がり25cmを測る。壁溝は幅26cm、深さ14cmの規模で巡る。柱穴は、4個検出した。床面は平坦で、よくしまっている。

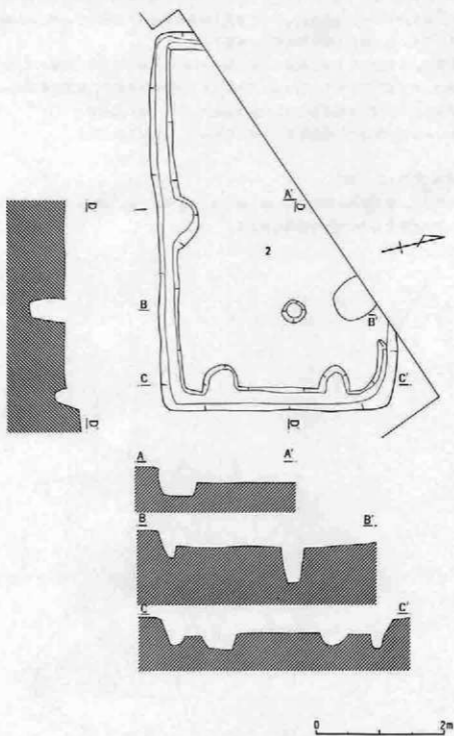
カマドは、北壁の東寄りに所在する。区域外にかかり、全容は不明である。

出土遺物(第11・12・13図)

遺物は豊富で、須恵器杯・高台付杯・埴・鉢・甕、土師器甕、瓦、鉄製品刀子が出土している。以下に、図示できたものについて解説を加える。

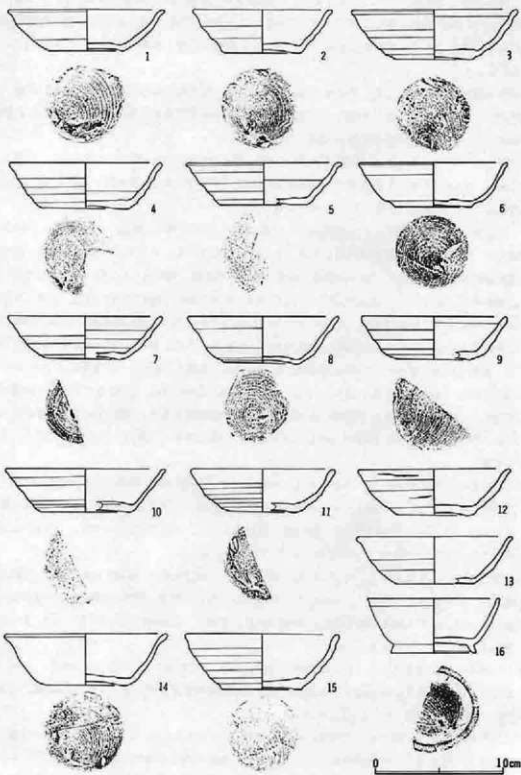


第9図 第2号住居跡遺物出土状態図(1/60)



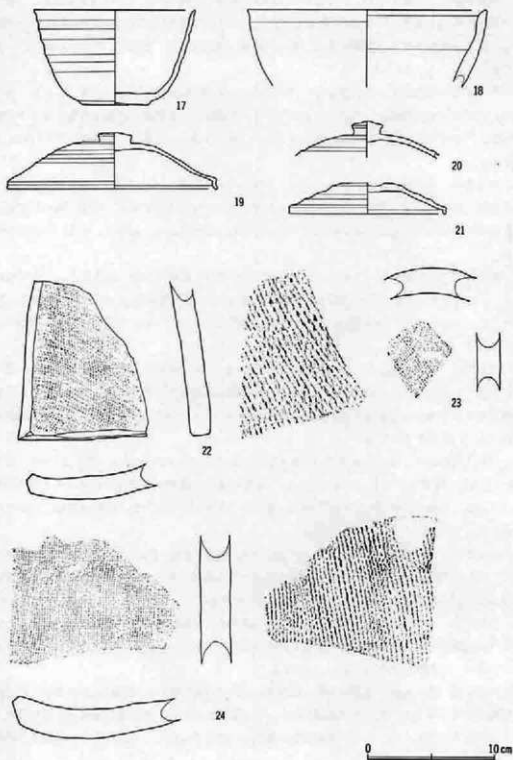
第10圖 第2号住居跡 (1/60)

1. 須恵器環 d区覆土出土。完存率30%。口径12.3cm, 底径6.0cm, 器高3.3cmを測る。口径・底径比は、0.48を示す。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁は外反する。水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。胎土は、4mm大の石を含む。焼成は良好。色調は、青灰色(5BG6/1)を呈する。
2. 須恵器環 a区覆土出土。完存率40%。口径11.1cm, 底径6.0cm, 器高3.4cmを測る。口径・底径比は、0.54を示す。水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。胎土は、2mm大の石を含む。焼成は良好。色調は、暗青灰色(5B4/1)を呈する。
3. 須恵器環 カマド内出土。完存率60%。口径13.0cm, 底径6.0cm, 器高3.9cmを測る。口径・底径比は、0.46を示す。水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。胎土は、5mm大の石を含む。焼成は良好。色調は、灰色(7.5Y6/1)を呈する。
4. 須恵器環 a区覆土出土。完存率40%。口径12.1cm, 底径6.8cm, 器高3.6cmを測る。口径・底径比は、0.56を示す。体部は外斜して立ち上がり、口縁はゆるく外反する。水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。胎土は精良。焼成は良好。色調は、褐灰色(7.5YR5/1)を呈する。
5. 須恵器環 No12出土。完存率35%。口径12.4cm, 底径7.0cm, 器高3.3cmを測る。口径・底径比は、0.56を示す。体部は外斜して立ち上がり、口縁部は外反する。水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。ロクロは右回転、底部外面にヘラ記号がある。胎土は砂粒を含む。焼成は良好で、高温で焼成したために内面が海綿状になっている。色調は、青灰色(10BG6/1)を呈する。
6. 須恵器環 a区覆土出土。完存率70%。口径11.8cm, 底径6.0cm, 器高3.5cmを測る。口径・底径比は、0.50を示す。水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。体部外面に不整合が認められる。胎土は、白色針状物質・5mm大の石を含む。焼成は良好。色調は、灰白色(7.5Y7/1)を呈する。
7. 須恵器環 b区覆土出土。完存率35%。口径12.2cm, 底径6.0cm, 器高3.4cmを測る。口径・底径比は、0.49を示す。体部は、やや内湾気味に立ち上がる。水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。ロクロは右回転である。胎土は、砂を多く含む。焼成は良好。色調は、底部かにぶい橙色(5YR6/4)、他がオリーブ黄色(5Y6/3)を呈する。
8. 須恵器環 a区覆土出土。完存率40%。口径12.2cm, 底径5.6cm, 器高3.7cmを測る。口径・底径比は、0.46を示す。体部は、外斜して立ち上がる。水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。胎土は、砂・4mm大の石を含む。焼成は良好。色調は、底面が浅黄色(2.5Y7/3)、その他が灰色(7.5Y5/1)を呈する。
9. 須恵器環 a区覆土出土。完存率20%。口径11.4cm, 底径5.6cm, 器高3.4cmを測る。口径・底径比は、0.49を示す。体部は水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。胎土は精良。焼成は良好。色調は、灰色(7.5Y5/1)を呈する。
10. 須恵器環 カマド内出土。完存率30%。口径12.7cm, 底径7.0cm, 器高3.4cmを測る。口径・底径比は、0.55を示す。体部は外斜して立ち上がる。体部は水引き調整、底部は回転糸切り未調整。底部断面に不整合が認められる。胎土は、砂を含む。焼成は良好。色調は、灰色(7.5Y6/1)を呈する。



第11图 第2号住居跡出土遺物 ① (1/3)

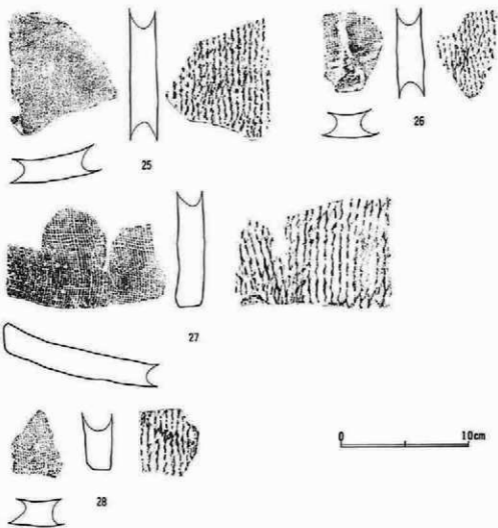
11. 須恵器環 a区覆土出土。完存率40%。口径11.5cm, 底径5.0cm, 器高3.4cmを測る。口径・底径比は、0.43を示す。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は肥厚になる。体部は水引き調整で、底部は回転糸切り未調整である。胎土は精良。焼成は良好。色調は、灰色(7.5Y6/1)を呈する。
12. 須恵器環 覆土出土。完存率50%。口径12.1cm, 底径6.2cm, 器高3.6cmを測る。口径・底径比は、0.51を示す。体部は、外斜して立ち上がる。体部は水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。ロクロは右回転。胎土は、砂を多く含む。焼成は良好。色調は、黄灰色(2.5Y6/1)を呈する。
13. 須恵器環 a区覆土出土。完存率30%。口径12.2cm, 底径6.0cm, 器高3.7cmを測る。口径・底径比は、0.49を示す。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。体部は水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。胎土は、砂粒を含む。焼成は良好。色調は、灰色(Y6/1)を呈する。
14. 須恵器環 No.6出土。完存率85%。口径12.8cm, 底径6.6cm, 器高4.1cmを測る。口径・底径比は、0.51を示す。体部は水引き調整、口縁部内面はナデ、底部は回転糸切り未調整である。胎土は、5~8mm大の石・砂を含む。焼成は不良。色調は、淡黄色(2.5Y8/3)を呈する。器表がザラついている。
15. 須恵器環 覆土上層出土。完存率60%。口径12.4cm, 底径6.4cm, 器高4.1cmを測る。口径・底径比は、0.50を示す。体部は水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。胎土は、白色針状物質を多量に含む。焼成は不良。色調は、断面及び内面下位が橙色(2.5YR7/6)、その他が黄褐色(2.5YR5/3)を呈する。
16. 須恵器高台付環 b区覆土出土。完存率35%。口径10.4cm, 底径6.3cm, 高台径6.7cm, 器高4.4cmを測る。体部は、外斜して立ち上がる。体部は水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。ロクロは右回転。高台は貼りつけである。胎土は、1cm大の石を含む。焼成は良好。色調は、暗青灰色(5BG4/1)を呈する。
17. 須恵器碗 覆土出土。完存率30%。口径12.7cm, 底径5.4cm, 器高7.4cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がる。体部は水引き調整、底部は糸切り未調整である。胎土は、5mm大の石を含む。焼成は良好。色調は、灰オリーブ色(5Y6/2)を呈する。
18. 須恵器鉢 b区覆土出土。破片。口径18.9cmを測る。体部は外斜し、口縁直下で直立する。体部は水引き調整である。胎土は砂を含む。焼成は良好。色調は、外面が灰黄色(2.5Y6/2)で光沢があり、その他は灰色(N6/0)を呈する。
19. 須恵器蓋 No.7出土。完存率65%。口径16.7cm, つまみ径2.8cm, 器高4.4cmを測る。整った形の蓋に扁平のつまみが付く。口縁端部はシャープな作りである。天井部は回転ヘラ削り調整、つまみは貼りつけである。ロクロは右回転。胎土は、砂を多く含む。焼成は良好。色調は、灰色(7.5Y7/1)を呈する。
20. 須恵器蓋 a区覆土出土。完存率35%。つまみ径2.4cmを測る。水引き調整、天井部は回転ヘラ削り調整。ロクロは右回転。つまみは貼りつけである。胎土は、白色針状物質を含む。焼成は



第12图 第2号住居跡出土遺物 ② (1/3)

良好。色調は、にぶい黄橙色（10Y R6/3）を呈する。

21. 須恵器蓋 覆土出土。完存率45%。口径12.3cm、現高2.4cmを測る。整ったつくりである。水引き調整、天井部は回転ヘラ削り調整である。ロクロは右回転。胎土は砂を含む。焼成は良好。色調は、灰色（7.5Y6/1）を呈する。
22. 平瓦 No10出土。厚さ1.6cmを測る。外面は布目痕、内面は縄目痕を残す。側端部は、ヘラで鋭く削られ、2つの面がつくられている。胎土は、砂を含む。焼成は良好。色調は、灰色（7.5Y R 8/2）を呈する。



第13図 第2号住居跡出土遺物 ㊸ (1/3)

23. 丸瓦 覆土出土。破片。厚さ2cmを測る。外面は十字、内面は布目痕。胎土は、砂を含む。焼成は良好。色調は、にぶい橙色(5YR6/3)を呈する。
24. 平瓦 Na1出土。破片。厚さ2.1cmを測る。外面は布目痕、内面は縄目痕を残す。側端部は、へらで削り取られている。胎土は、砂を含む。焼成は不良。色調は、灰白色(7.5YR8/2)を呈する。
25. 平瓦 a区覆土出土。破片。厚さ1.9cmを測る。外面は布目痕、内面は縄目痕を残す。胎土は砂を含む。焼成は良好。色調は、淡黄色(2.5Y8/3)を呈する。
26. 平瓦 カマド内出土。破片。厚さ1.7cmを測る。外面は布目痕、内面は縄目痕を残す。胎土は砂を含む。焼成は良好。色調は、にぶい橙色(5YR6/4)を呈する。
27. 平瓦 Na5出土。破片。厚さ2cmを測る。外面は布目痕、内面は縄目痕を残す。側端部はへら削りである。胎土は、砂を含む。焼成は良好。色調は、灰白色(7.5YR8/2)を呈する。
28. 平瓦 覆土出土。破片。厚さ2.0cmを測る。外面は布目痕、内面は縄目痕を残す。胎土は、砂を含む。焼成は良好。色調は、灰白色(7.5YR8/2)を呈する。

第3号住居跡(第14・15図)

本跡は、調査区東端の(あ-7)Gにて検出した。東壁に所在するカマドの一部分が、調査区域外にかかったため土地所有者の承諾を得て拡張した。西に18m離れて第1号住居跡、東に70m離れて4次調査区の第2号掘立柱建物跡が所在する。

平面形態は、長方形を呈する。規模は東西4.16m、南北3.75m、床面積15.6m²を測る。主軸方位は、N-78°-Eを示す。壁体は、斜めに立ち上がり38cmを測る。壁溝は、東壁と北壁の一部を除いて巡り、幅30cm、深さ10cmを測る。柱穴は、東壁下に2個検出した。床面は、よくふみかためである。床面上には、壁にそって焼土のかたまりが三角堆積のように遺存していた。炭化材・炭化物は検出しなかった。

調査を終了して床面を切開したところ、5cm程下でもう1つの床を検出した。この床面を追求した結果、壁溝・柱穴を検出したので住居が2軒重複したものの、あるいは拡張したものと思われる。

平面形態は、正方形を呈する。規模は東西3.46m、南北3.55m、床面積12.2m²を測る。壁体は、南・西壁を共有している。壁溝は幅37cm、深さ8cmを測る。柱穴は、2個検出した。床面は、非常にかたく踏まれている。

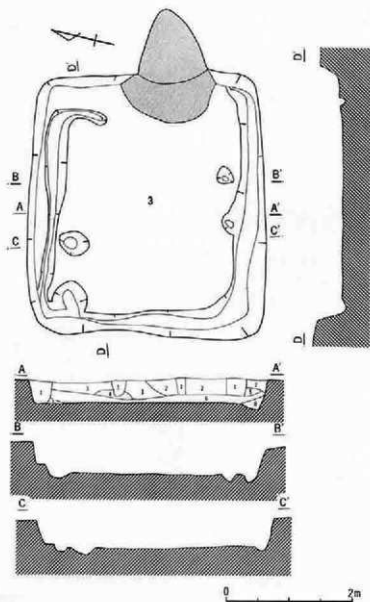
カマドは、床が上の住居跡では東壁の中央やや南に所在する。規模は、幅0.7m、長さ1.08mを測る。構築用材は、灰褐色粘土である。

出土遺物(第16・38図)

遺物は、須恵器環・埴、土師器甕、鉄製品釘・棒が出土している。出土量は少ない。図示し得たものは、土器3点、鉄製品2点だけで、残りは細かな破片である。

1. 須恵器環 b区覆土出土。完存率50%。口径13.6cm、底径8.8cm、器高3.6cmを測る。口径・底径比は0.64を示す。体部は外斜して立ち上がる。体部は水引き調整、底部は回転糸切り後回転へら削り調整を施す。胎土は精良。焼成は良好。色調は、浅黄色(2.5Y7/4)を呈する。

2. 須恵器坏 b区覆土出土。完存率60%。口径13.9cm, 底径7.4cm, 器高3.6cmを測る。口径・底径比は0.53を示す。体部は内湾気味に立ち上がり, 口縁は外反す。体部は水引き調整, 底部は全面回転へラ削り調整である。ロクロは右回転。胎土は精良。焼成は良好。色調は, 灰色(N6/0)を呈する。ていねいな作りの土器である。
3. 須恵器埴 a区覆土。完存率70%。口径17.4cm, 底径10.8cm, 器高5.9cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり, 口縁端部は外に屈曲する。端部上面は平坦である。胎土は精良。焼成は良好。色調は, 青灰色(5BG5/1)を呈する。ていねいな作りの土器である。



第3号住居跡土層注

(第14図)

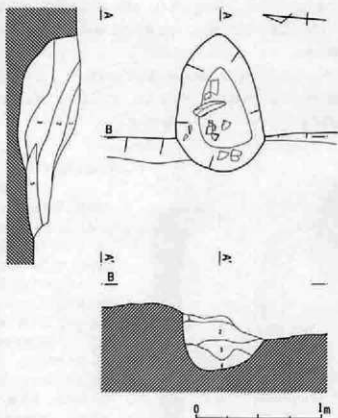
- 第1層：暗褐色土，ゴボウの擾乱。第2層：褐色土，ロームブロックを多数含む。第3層：褐色土，ローム粒子を含む。第4層：黄褐色土，ローム粒子を含む。第5層：暗褐色土，ローム粒子を含む。第6層：黒褐色土，ローム粒子を若干含む。第7層：褐色土。第8層：ロームブロックを多数含む。

第14図 第3号住居跡 (1/60)

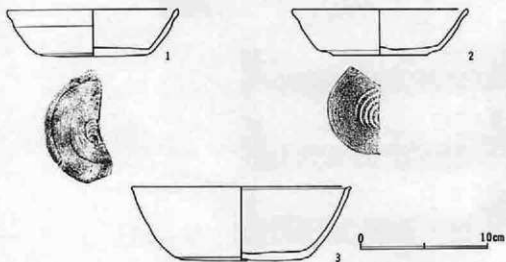
第3号住居跡カマド土層注

(第15図)

第1層：黒褐色土、焼土粒子、ローム粒子を少し含む。第2層：灰褐色粘土。第3層：赤褐色土、焼土粒子、ローム粒子、灰を含む。第4層：黒褐色土。第5層：暗褐色土、焼土粒子、焼土ブロックを含む。



第15図 第3号住居跡カマド (1/30)



第16図 第3号住居跡出土遺物 (1/3)

4次調査

第4号住居跡(第19図)

本跡は、調査区の南端に位置する。調査区域外にかかり、一部分の調査となった。第4・5号掘立柱建物跡と重複して、これに切られている。西に5m離れて第2号掘立柱建物跡、東に11m離れて2次調査区の第1号掘立柱建物跡が所在する。

平面形態は、方形を呈する。規模は、北壁で5.35mを測る。掘り方は、ローム面から5~8cmと浅く、床面は平坦で軟弱である。一部掘立柱建物跡の柱穴が床面を破壊している。壁溝・柱穴は、検出しなかった。

出土遺物は、皆無である。

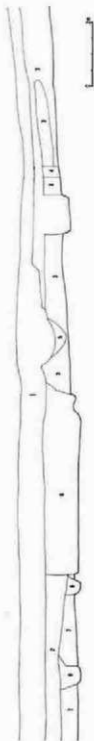
第2号掘立柱建物跡(第19図)

本跡は、調査区の南端に位置する。調査区域外にかかり、柱穴1個が半分掘れなかった。東に7m離れて第4・5号掘立柱建物跡・第4号住居跡、西に70m離れて3次調査区の第3号住居跡が所在する。

平面形態は、長方形を呈する。規模は南北2間(4.1m)、東西3間(4.5m)で、面積18.45㎡を測る。主軸方位は、N-74°-Wを示す。柱穴は、10個検出した。コーナーに所在する柱穴は、渠行、桁行の柱穴と向きが異なる。各柱穴の平面形態は、長方形を呈する。規模は、長軸が80~140cm、短軸が60~100cm、深さ25~50cmを測る。それぞれの柱穴には、柱痕が遺存しており、直径25~53cmを測る。P₅では2個検出した。

4次調査区南壁土層注(第17図)

第1層:褐色土、耕作土。第2層:黒褐色土、ローム粒子、焼土粒子を若干含む。第3層:黒褐色土、第2層に比べ非常にかたくしまっている。第4層:黒褐色土、焼土粒子を含む。第5層:褐色土、砂質で水流の可能性あり、互層になっている。(ロームを掘りこまない溝の断面である)第6層:黒褐色土、焼土粒子を多量に含む。(4号住居跡覆土)第7層:黒褐色土、第2層に比べ非常にかたくしまっている。第8層:黒褐色土、第5号掘立柱建物跡の柱穴。第9層:黒褐色土、第5号掘立柱建物跡の柱穴。

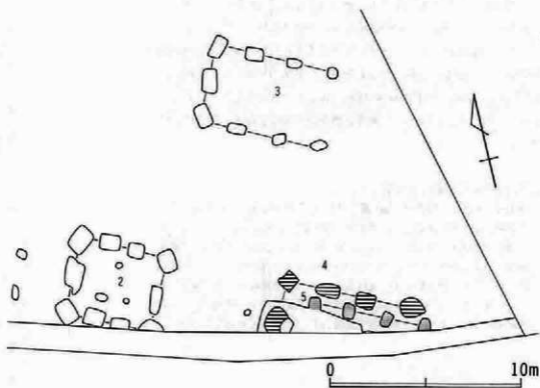


第17図 4次調査区土層図
(1/120)

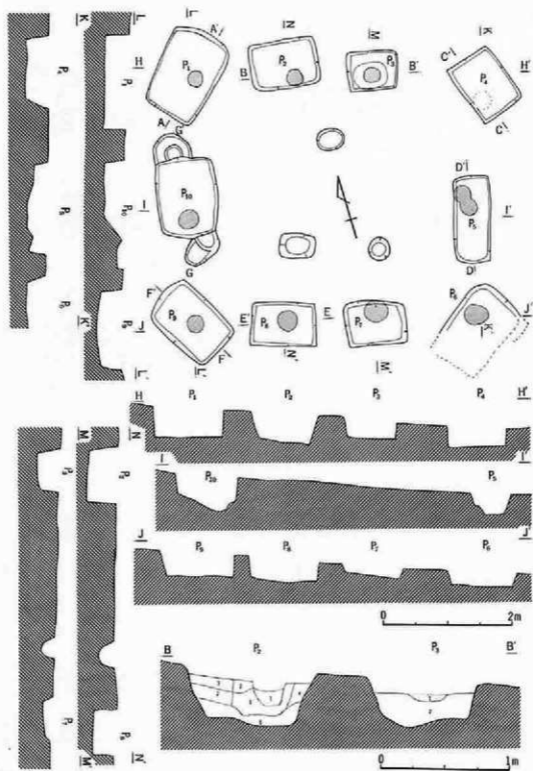
形状	大きさ	深さ	その他	形状	大きさ	深さ	その他		
P 1	長方形	140×70cm	50cm	柱径径25cm	P 2	長方形	110×74cm	40cm	柱径径25cm
P 3	長方形	80×60cm	35cm	柱径径25cm	P 4	長方形	100×80cm	40cm	柱径径30cm
P 5	長方形	140×60cm	25cm	柱径径25cm	P 6	全容は不明			柱径径36cm
P 7	長方形	96×70cm	15cm	柱径径35cm	P 8	長方形	100×70cm	40cm	柱径径30cm
P 9	長方形	130×86cm	35cm	柱径径25cm	P 10	長方形	130×100cm	40cm	柱径径30cm

柱穴間・柱痕間距離は、 P_1-P_2 が0.3・1.6m、 P_2-P_3 が0.4・1.2m、 P_3-P_4 が0.75・1.7m、 P_4-P_5 が0.8・1.6m、 P_5-P_6 が0.32・1.7m、 P_6-P_7 が0.5・1.6m、 P_7-P_8 が0.45・1.4m、 P_8-P_9 が0.27・1.45m、 P_9-H_0 が0.6・1.7m、 H_0-P_{10} が0.5・2.2mをそれぞれ測る。

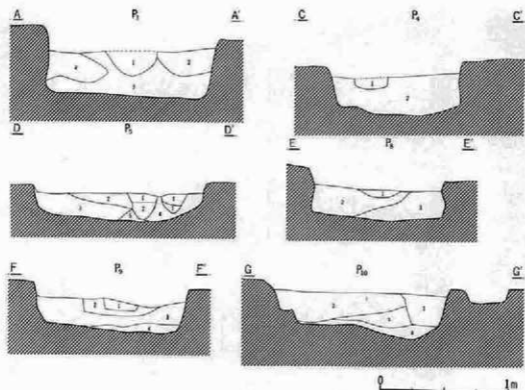
遺物は、土器では須恵器環・甕が P_1 ・ P_3 ・ P_8 ・ P_9 ・ P_{10} で出土している。図示できるものはなく、小破片である。須恵器環の底部破片は、回転糸切り後に外周部回転へラ削り調整を施している。金属製品は、 P_1 から鉄製刀子(第38図)が1点出土している。



第18図 4次調査区掘立柱建物跡配置図(1/200)



第19图 第2号孤立柱建物特① (1/60)



第20図 第2号掘立柱建物跡 ② (1/30)

第2号掘立柱建物跡柱穴土層注

- P 1 第1層：褐色土，ローム粒子を含む，軟質（柱底） 第2層：黒褐色土，ローム粒子を含む。第3層：黒褐色土，ロームブロックと互層をなす。かたくしまっており，つきかためたようである。第4層：黄褐色土，黒色土ブロックを含む。（ローム）
- P 2 第1層：褐色土，ローム粒子を含む，軟質（柱底） 第2層：黒褐色土，かたくしまっている。第3層：暗褐色土，ローム粒子を多量に含む。第4層：黄褐色土，ロームブロック・黒色土が混在している。第5層：黄褐色土，軟質のローム。
- P 3 第1層：褐色土，ローム粒子を含む，軟質（柱底） 第2層：黒褐色土，ロームブロックと互層をなす。かたくしまっており，つきかためたようである。
- P 4 第1層：褐色土，ローム粒子を含む，軟質（柱底） 第2層：黒褐色土，ロームブロックと互層をなす。かたくしまっており，つきかためたようである。
- P 5 第1層：褐色土，ローム粒子を含む，軟質（柱底） 第2層：黒褐色土，かたくしまっている。第3層：黒褐色土，ロームブロックと互層をなす。かたくしまっており，つきかためたようである。第4層：暗褐色土，ロームブロック・黒色土が混在している。第5層：黄褐色土，軟質のローム。
- P 8 第1層：褐色土，ローム粒子を含む，軟質（柱底） 第2層：黒褐色土，かたくしまっている。第3層：暗褐色土，ローム粒子を多量に含む。
- P 9 第1層：褐色土，ローム粒子を含む，軟質（柱底） 第2層：暗褐色土，ローム粒子を多量に含む。第3層：黒褐色土，ロームブロックと互層をなす。かたくしまっており，つきかためたようである。第4層：黄褐色土，軟質のローム。
- P 10 第1層：褐色土，ローム粒子を含む，軟質（柱底） 第2層：黒褐色土，かたくしまっている。第3層：暗褐色土，ローム粒子を多量に含む。第4層：黒褐色土，ロームブロックと互層をなす。かたくしまっており，つきかためられたようである。

第3号掘立柱建物跡(第21図)

本跡は、調査区のはほぼ中央に位置する。この部分はロームが傾斜しており、東側の柱穴列の検出が難しかった。南に7m離れて第4・5号掘立柱建物跡・第4号住居跡が所在する。

平面形態は、長方形を呈する。規模は、南北2間(4.0m)、東西3間(6.2m)、面積24.8m²を測る。主軸方位は、N-74°-Wを示す。柱穴は、9個検出した。コーナーに所在する柱穴は、第2号掘立柱建物跡と同様な向きをしている。柱穴の平面形態は、長方形を呈している。P₁~P₆は、傾斜地の低いほうに掘られており、柱穴底面を検出したためにプランが円形となっている。規模は、長軸が70~110cm、短軸44~70cmを測る。どの柱穴でも柱痕は検出されなかった。

	形状	大きさ	深さ	その他		形状	大きさ	深さ	その他
P1	長方形	110×60cm	40cm		P2	長方形	90×66cm	50cm	
P3	長方形	70×44cm	10cm	底面検出のみ	P4	円形	直径60cm	14cm	
P5	ほとんど検出できず、痕跡があったのみ				P6	楕円形	直径60cm	30cm	
P7	長方形	70×44cm	20cm		P8	長方形	100×60cm	44cm	
P9	長方形	110×60cm	60cm		P10	長方形	110×60cm	20cm	

柱穴間距離は、P₁-P₂が1.1m、P₂-P₃が1.25m、P₃-P₄が1.48m、P₄-P₅が1.3m、P₅-P₆が1.59m、P₆-P₇が0.8m、P₇-P₈が0.62m、P₈-P₉が0.6mをそれぞれ測る。

遺物は、P₁・P₂で須恵器環が、P₁・P₂・P₄・P₅で土師器装か出土している。いずれも小破片のため図示できなかった。

第4号掘立柱建物跡(第22図)

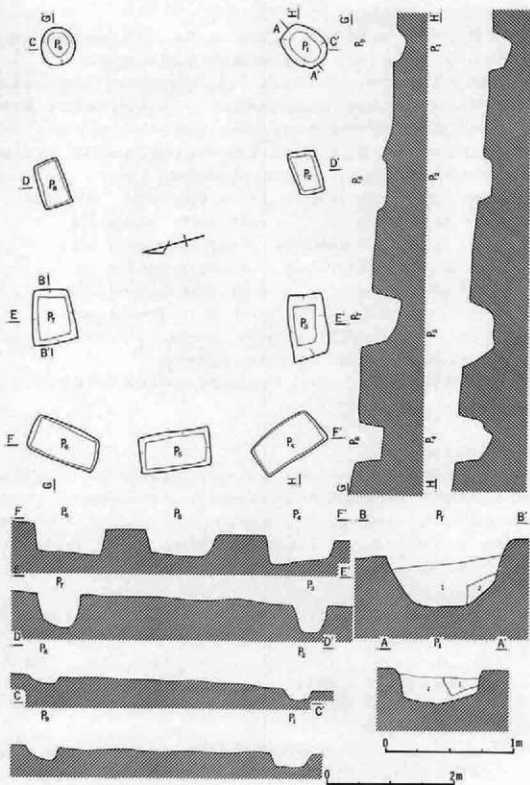
本跡は、調査区の南端に位置している。調査区域外にかかり、全容は不明である。第4号住居跡・第5号掘立柱建物跡と重複しており、第4号住居跡を切っている。東に8m離れて2次調査区第1号掘立柱建物跡、北に7m離れて第3号掘立柱建物跡、西に5m離れて第2号掘立柱建物跡、東南に13m離れて5次調査区第6・7・9号掘立柱建物跡が所在する。

検出した部分は、北側の柱穴列と東側の柱穴の計5個である。北側柱穴列は、3間(7.62m)の規模を測る。向きはN-74°-Wを示す。柱穴の平面形態は、検出した部分か柱穴の底面近くであったのでまちまちであるが、規模は平均して100cmである。各柱穴からは柱痕が検出され、そのすぐ脇に柱のおさえと考えられる河原石が検出された。柱痕規模は、直径20~35cmを測る。

	形状	大きさ	深さ	その他		形状	大きさ	深さ	その他
P1	円形	直径100cm	50cm	柱痕径20cm	P2	楕円形	120×70cm	40cm	柱痕径35cm
P3	長方形	100×80cm	22cm	柱痕径35cm	P4	円形	直径100cm	40cm	柱痕径38cm
P5	円形	直径120cm	50cm						

柱穴間・柱痕間距離は、P₁-P₂が0.94・2.1m、P₂-P₃が0.85・2.3m、P₃-P₄が1.4・2.3m、P₄-P₅が0.98mをそれぞれ測る。

遺物は、土器ではP₃・P₅・P₄から須恵器環、P₁・P₂から須恵器装、P₃・P₅から土師器装が出土。金属製品では、P₄から鉄製釘(第38図)が1点出土している。土器は、どれも小破片のため図示で



第21圖 第3号獨立柱建物跡 (1/60・1/30)

きなかったが、須恵器環の底部破片の観察では、回転糸切り後、外周部を回転ヘラ刮り調整を施すものが多い。

第5号掘立柱建物跡（第22図）

本跡は、調査区の南端に位置している。調査区域外にかかり、全容は不明である。第4号住居跡・第4号掘立柱建物跡と重複して、第4号住居跡を切っている。

検出した部分は、北側の柱穴列だけであった。規模は、3間（6.45m）を測る。柱穴は、4個検出した。柱穴プランは円形を呈し、直径60～90cm、深さ10～26cmを測る。すべての柱穴で柱痕を検出、直径20～25cmを測る。東西の柱穴列の向きは、N-74°-Wを示す。

形状	大きさ	深さ	その他	形状	大きさ	深さ	その他		
P 1	円形	直径60cm	10cm	柱痕径25cm	P 2	楕円形	90×60cm	10cm	柱痕径25cm
P 3	楕円形	70×60cm	14cm	柱痕径23cm	P 4	円形	直径30cm	26cm	柱痕径20cm

柱穴間・柱痕間距離は、 P_1-P_2 が $1.28 \cdot 1.90$ m、 P_2-P_3 が $1.40 \cdot 2.00$ m、 P_3-P_4 が $1.30 \cdot 2.00$ mをそれぞれ測る。

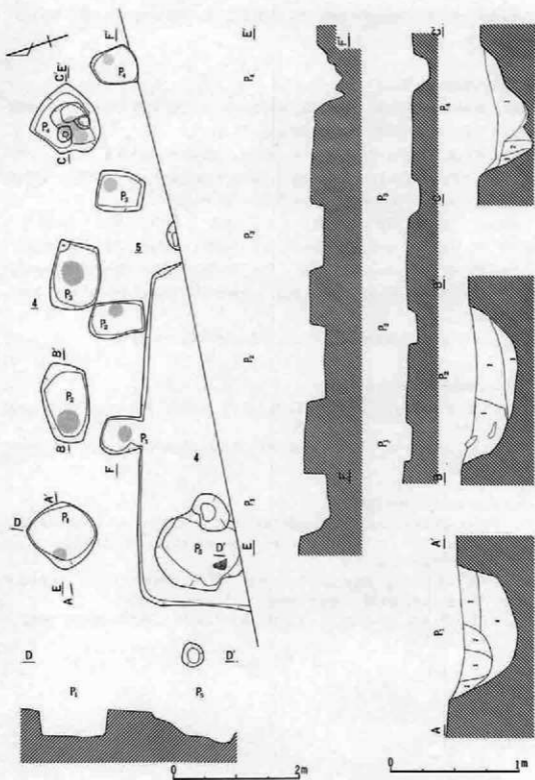
遺物は、 $P_1 \cdot P_2$ から土師器類が出土している。小破片のため図示できず。

第3号掘立柱建物跡柱穴土層注（第21図）

- P 1 第1層：暗褐色土、ローム小ブロックを多く含む。第2層：黄褐色土、黒色土ブロックとロームが混在した層。
- P 7 第1層：暗褐色土、ローム小ブロックを多く含む。第2層：黄褐色土、黒色土ブロックとロームが混在した層。

第4号掘立柱建物跡柱穴土層注（第22図）

- P 1 第1層：褐色土、ローム粒子を含む。軟質（柱痕） 第2層：暗褐色土、ローム小ブロックを含む。かたくしまっている。第3層：黒褐色土、ロームブロックを少し含む。第4層：黄褐色土、ロームブロック、黒色土が混在した層。
- P 2 第1層 黒褐色土、ローム粒子を若干含む。（柱痕） 第2層：黒褐色土、ロームブロックを多量に含み互層をなす。第3層：黄褐色土、黒色のブロックを含むローム層。
- P 4 第1層：黒褐色土、ローム粒子ブロックを含む。第2層：黄褐色土、黒色土を多く含む。軟質。第3層：黄褐色土。



第22图 第4号住居跡、第4・5号掘立柱建物跡 (1/60・1/30)

5次調査

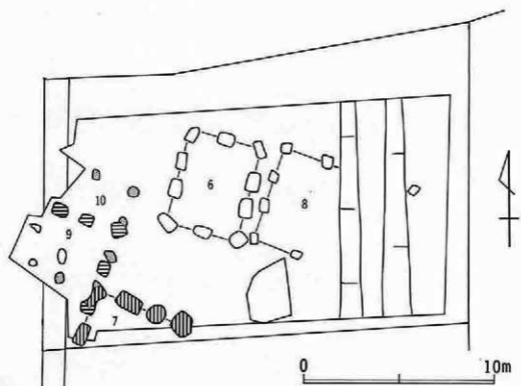
第6号掘立柱建物跡（第24・25図）

本跡は、調査区の中央に位置している。東側に隣接して第8号掘立柱建物跡、南に4m離れて第7号掘立柱建物跡、西に1m離れて第9・10号掘立柱建物跡、北に9m離れて2次調査区の第1号掘立柱建物跡が所在する。

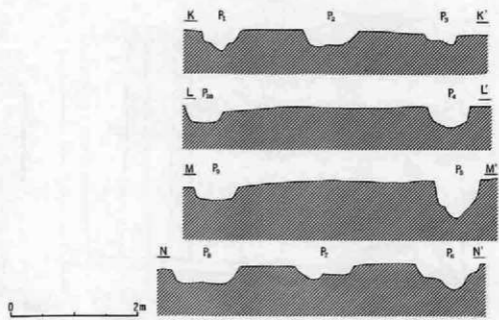
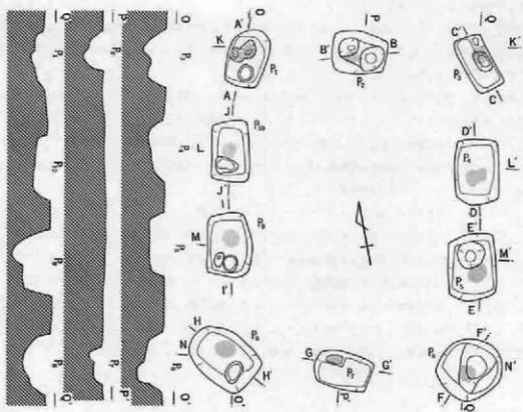
平面形態は、長方形を呈する。規模は、東西2間（4.85m）、南北3間（5.70m）、面積27.64㎡を測る。主軸方位は、N-11.5°-Eを示す。柱穴は、10個検出した。コーナーに所在する柱穴は、第2・3号掘立柱建物跡と同じように向きをかえている。柱穴の平面形態は長方形が多く、楕円形もある。規模は長軸86~115cm、短軸45~84cm、深さ20~58cmをそれぞれ測る。いずれの柱穴からも柱痕が検出された。P₁では2個検出。

形状	大きさ	深さ	その他	形状	大きさ	深さ	その他		
P1	楕円形	93×62cm	32cm	柱痕径21cm	P2	長方形	86×65cm	24cm	柱痕径20cm
P3	長方形	92×45cm	20cm	柱痕径25cm	P4	長方形	102×70cm	33cm	柱痕径25cm
P5	長方形	104×75cm	58cm	柱痕径28cm	P6	円形	直径100cm	40cm	柱痕径25cm
P7	楕円形	91×60cm	21cm	柱痕径21cm	P8	楕円形	115×84cm	26cm	柱痕径26cm
P9	長方形	102×71cm	20cm	柱痕径25cm	P10	長方形	96×64cm	24cm	柱痕径20cm

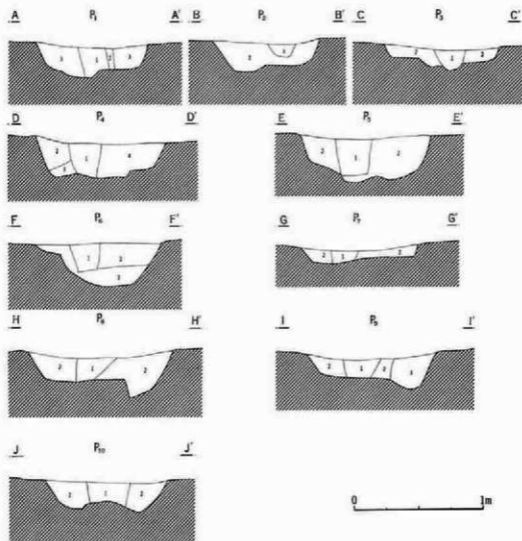
柱穴間・柱痕間距離は、P₁-P₂が1.00・1.60m、P₂-P₃が1.05・2.00m、P₃-P₄が0.72・1.90m、



第23図 5次調査区掘立柱建物跡配置図（1/200）



第24图 第6号掘立柱建物跡 ① (1/60)



第25図 第6号掘立柱建物跡 ㊸ (1/30)

第6号掘立柱建物跡柱穴土層注 (第25図)

- P 1 第1層：黒褐色土，ローム粒子を含む。第2層：黄褐色土，ロームブロックを含む。第3層：暗褐色土，ロームブロックを含む。かたくしまっている。
- P 2 第1層：黒褐色土，ローム粒子を含む。軟質。第2層：暗褐色土，ロームブロックを含む。かたくしまっている。
- P 3 第1層：黄褐色土，ローム粒子を多量に含む。第2層：黄褐色土，ロームブロック，黒色土を含む。
- P 4 第1層：黒褐色土，ローム粒子を含む。軟質。第2層：黒褐色土。第3層：黄褐色土，黒色土ブロックを含む。第4層：暗褐色土，ローム粒子を含む。かたくしまっている。
- P 5 第1層：黒褐色土，ローム粒子を含む。軟質。第2層：黒褐色土，ロームブロック，ローム粒子を多量に含む。しまりあり。

- P6 第1層：黒褐色土、ローム粒子を含む。軟質。第2層：黒褐色土、ローム粒子とロームブロックを少量含む。かたくしまっている。第3層：暗褐色土、ロームブロックを多く含む。
- P7 第1層：黒褐色土、ローム粒子を含む。軟質。第2層：暗褐色土、ロームブロックを多量に含む。かたくしまっている。
- P8 第1層：暗褐色土、ローム粒子を含む。軟質。第2層：黒褐色土、ロームブロックを含む。
- P9 第1層：暗褐色土、ローム粒子を含む。軟質。第2層：黒褐色土、しまりあり。第3層：黒褐色土、ロームブロック、ローム粒子を多量に含む。
- P10 第1層：黒褐色土、ローム粒子を含む。軟質。第2層：黒褐色土、ロームブロックを含む。しまりあり。

P_1-P_2 が $0.45 \cdot 1.50$ m, P_2-P_3 が $0.60 \cdot 1.60$ m, P_3-P_4 が $0.95 \cdot 2.10$ m, P_7-P_8 が $0.80 \cdot 1.70$ m, P_8-P_9 が $0.82 \cdot 1.75$ m, P_9-R_0 が $0.45 \cdot 1.35$ m, R_0-P_1 が $0.50 \cdot 1.60$ mをそれぞれ測る。

出土遺物 (第31図)

遺物は、須恵器環・蓋、土師器環・甕が出土している。須恵器環以外は、小破片のため図示できず。

2. 須恵器環 P_3 出土。完存率40%。口径10.8cm, 底径6.5cm, 器高3.9cmを測る。口径・底径比は0.60を示す。体部は、外斜して立ち上がる。体部は水引き調整, 底部は回転糸切り未調整である。ロクロは右回転。胎土は、砂を多量に含む。焼成は良好。色調は、オリープ灰色 (2.5GY6/1) を呈する。

第7号掘立柱建物跡 (第27図)

本跡は、調査区の南端に位置している。調査区域外にかかり、一部分の調査となった。第9・10号掘立柱建物跡と重複して、これを切っている。北に4m離れて第6号掘立柱建物跡が所在する。

検出した部分は、北側の柱穴列と西側の柱穴の計5個である。全体の規模は、不明である。柱穴は、掘り方が大きく、長方形プランを呈する。大きさは、長軸100~150cm, 短軸52~112cm, 深さ20~58cmをそれぞれ測る。東西の柱穴列の向きは、N-69°Wを示す。

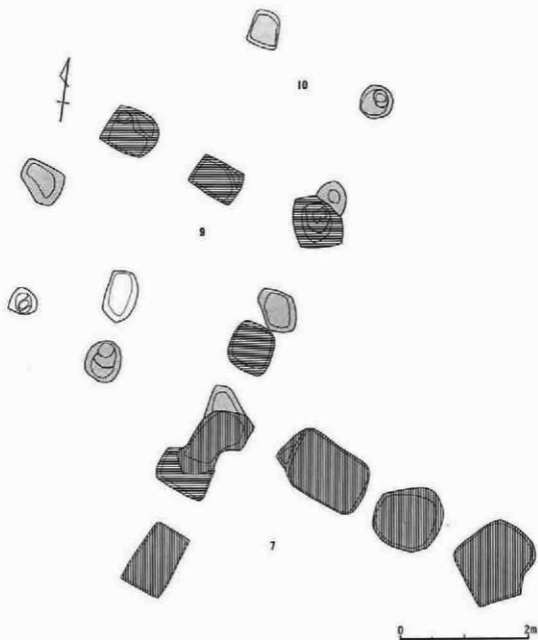
	形状	大きさ	深さ	その他	形状	大きさ	深さ	その他
P1	長方形	150×96cm	40cm	柱径径22cm	P2	円形	直径100cm	34cm 柱径径25cm
P3	楕円形	116×112cm	46cm	柱径径15cm	P4	長方形	105×67cm	40cm 柱径径25cm
P5	長方形	122×52cm	40cm					

柱穴間・柱穴間距離は、 P_1-P_2 が $0.70 \cdot 1.50$ m, P_2-P_3 が $0.25 \cdot 1.85$ m, P_3-P_4 が $0.36 \cdot 1.50$ m, P_5-P_1 が 0.95 mをそれぞれ測る。

出土遺物 (第31図)

遺物は、須恵器環・蓋、土師器環・甕が出土している。

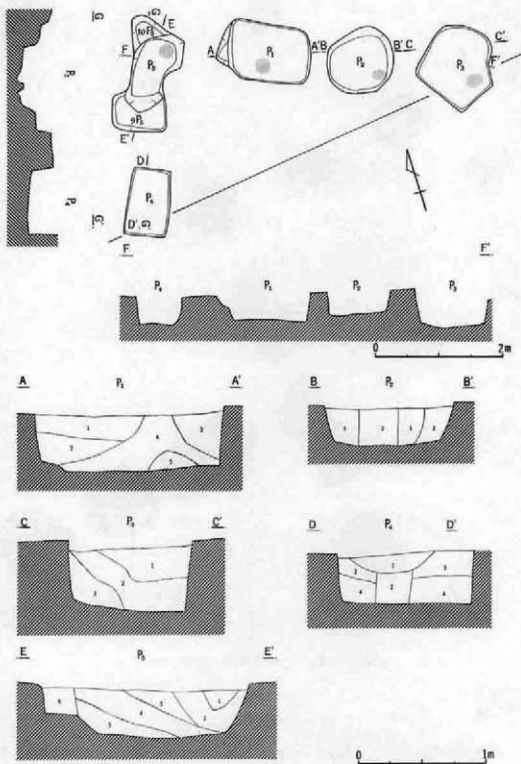
3. 須恵器環 P_4 出土。完存率40%。口径12.4cm, 底径6.6cm, 器高3.4cmを測る。口径・底径比は0.53を示す。体部は外斜して立ち上がる。体部は水引き調整, 底部は回転糸切り後周辺の回転ヘラ削り調整を施す。ロクロは右回転。胎土は砂を含む。焼成は良好。色調は、灰色 (N5/0) を



第26図 第7・9・10号掘立柱建物跡 (1/60)

呈する。

上記以外は小さな破片のため図示できなかった。そのなかで、須恵器環の底部破片では、底部が回転糸切り未調整と回転糸切り後周辺部へラ削り調整のものがある。土師器環は半球形を呈する。



第27图 第7号孤立柱建物跡 (1/60 · 1/30)

第8号掘立柱建物跡（第28図）

本跡は、調査区の東側に位置している。堀跡と重複して、これに切られている。西に隣接して第6号掘立柱建物跡が所在する。東側柱穴列は、堀跡のため数個の柱穴が消滅しているが、全体の規模は、3間×3間と思われる。

規模は北側の東西柱穴列で7.6m、西側の南北柱穴列で3間（5.7m）を測る。主軸方位は、N-16°-Eを示す。柱穴の平面形態は、長方形を呈する。規模は長軸50~80cm、短軸45~67cm、深さ11~22cmを測る。柱底は、検出されなかった。

	形状	大きさ	深さ		形状	大きさ	深さ
P 1	長方形	62×56cm	20cm	P 2	長方形	80×67cm	18cm
P 3	長方形	50×48cm	13cm	P 4	長方形	54×49cm	11cm
P 5	長方形	64×50cm	17cm	P 6	長方形	60×45cm	22cm
P 7	長方形	64×50cm	17cm				

柱穴間距離は、P₁-P₂が1.74m、P₄-P₅が1.90m、P₅-P₆が1.15m、P₆-P₇が1.00m、P₇-P₁が1.16mを測る。

出土遺物

遺物は、P₂・P₃から須恵器坏が出土している。小破片のため図示できないが、底部破片の観察では全面回転へう削りが施されている。

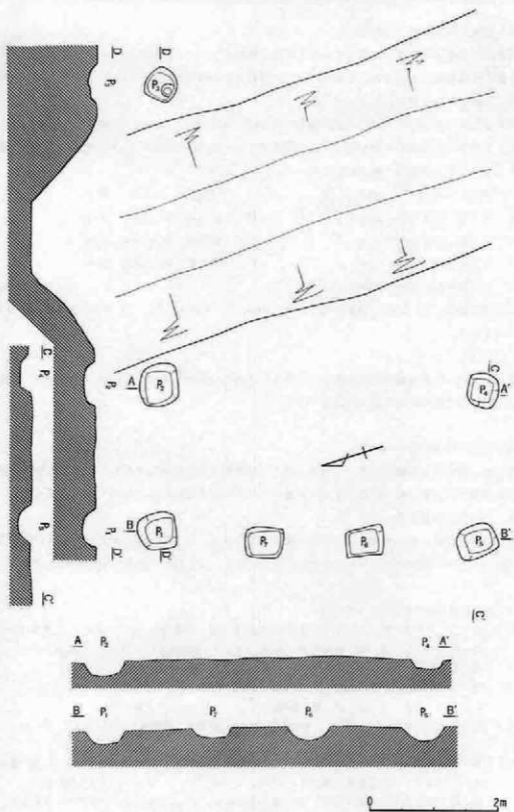
第9号掘立柱建物跡（第29図）

本跡は、調査区の西端に位置している。第7・10号掘立柱建物跡と重複しており、P₅が第7号掘立柱建物跡のP₁に切られている。東に1m離れて第6号掘立柱建物跡が所在する。調査区域外にかなり、一部分の調査となった。

検出した部分は、北と東の柱穴列で柱穴数は5本である。P₃とP₅の向きが第2・3・6号掘立柱建物跡のコーナー部分の柱穴と向きが類似する。P₅はコーナー部と思われ、東側柱穴列は2間であ

第7号掘立柱建物跡柱穴土層注（第27図）

- P 1 第1層：褐色土、粘土ブロックを多量に含む。第2層：黄褐色土、ロームブロックを多量に含む。粘土粒子も含む。第3層：黒褐色土、ロームブロックを多量に含む。第4層：暗褐色土、ローム粒子、粘土粒子を含む。第5層：暗褐色土、ローム粒子、粘土粒子を含む。
- P 2 第1層：暗褐色土、ローム粒子、粘土粒子を含む。軟質。第2層：黒褐色土、ロームブロックを含む。かたくしまっている。第3層：黄褐色土、ロームブロックを多量に含む。
- P 3 第1層：暗褐色土、ローム粒子、粘土粒子を含む。第2層：黒褐色土、ロームブロック、ローム粒子、粘土粒子を含む。第3層：黄褐色土、ロームブロックを多量に含む。
- P 4 第1層：褐色土、ロームブロックを含む。第2層：暗褐色土、ローム粒子を含む。第3層：黒褐色土、ロームブロックを含む。第4層：褐色土、ロームブロック、ローム粒子を多量に含む。
- P 5 第1層：暗褐色土、軟質（柱底）第2層：黒褐色土、ロームブロック、粘土ブロックを含む。しまりあり。第3層：灰色白土、焼土粒子、粘土を多量に含む。第4層：褐色土、ロームブロックを多く含む。第5層：黒褐色土、粘土粒子を含む。第6層：黒褐色土、ロームブロックを含む。



第28图 第8号孤立柱建物跡 (1/60)

る。北側柱穴列は、P₁の向きからみて2間以上になると思われる。規模は南北4.10m、東西は現況で5.06mを測る。北側柱穴列の向きは、N-70°-Wを示す。柱穴の平面形態は、長方形を呈する。規模は、長軸が76-86cm、短軸が55-76cm、深さ24-48cmを測る。柱痕は、P₂-P₄で検出した。P₁・P₂・P₄には、15-25cm大の河原石が埋められている。

	形状	大きさ	深さ	その他		形状	大きさ	深さ	その他
P 1	長方形	80×69cm	24cm	河原石	P 2	長方形	78×55cm	28cm	柱底径19cm
P 3	長方形	81×76cm	44cm	柱底径20cm	P 4	長方形	76×70cm	38cm	柱底径25cm
P 5	長方形	86×63cm	40cm						

柱穴間・柱痕間距離は、P₁-P₂が0.74m、P₂-P₃が0.90・1.70m、P₃-P₄が1.35・2.30m、P₄-P₅が1.50mをそれぞれ測る。

出土遺物

遺物は、須恵器・土師器・土師器・土師器が出土している。いずれも細破片のため図示できず。

第10号掘立柱建物跡（第30図）

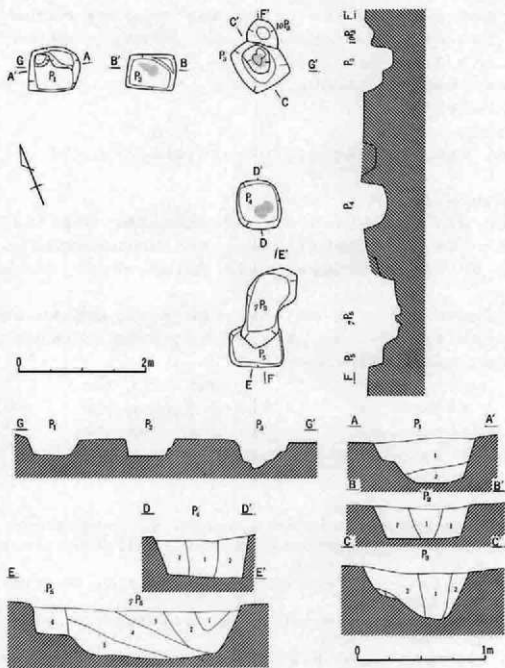
本跡は、調査区の西端に位置している。第7・9号掘立柱建物跡と重複し、P₂が第7号掘立柱建物跡P₂と、P₃が第9号掘立柱建物跡P₃とそれぞれ切り合っており、本跡が両掘立柱建物跡に切られている。東に1m離れて第6号掘立柱建物跡が所在する。西側が調査区域外となり、一部分の調査となった。

検出した部分は、東の柱穴列と北・南の1つの柱穴で、総数7本である。東側柱穴列は、3間で6.00mを測る。東側柱穴列の向きは、N-20°-Eを示す。柱穴の平面形態は、円形・長方形を呈する。規模は、径50cm前後、深さ13-37cmを測る。

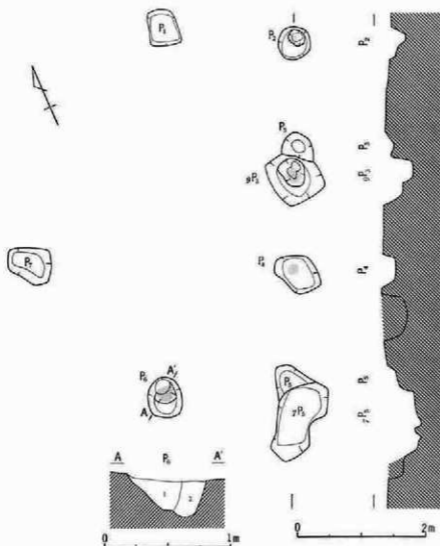
	形状	大きさ	深さ		形状	大きさ	深さ
P 1	方形	59×47cm	15cm	P 2	円形	直径50cm	22cm
P 3	円形	直径50cm	13cm	P 4	方形	50cm	20cm
P 5	円形	直径50cm	20cm	P 6	円形	直径60cm	37cm
P 7	方形	70×55cm	18cm				

第9号掘立柱建物跡柱穴土層注（第29図）

- P 1 第1層：黒褐色土、ローム小ブロックを含む。第2層：黄褐色土、ロームブロックを多量に含む。
- P 2 第1層：褐色土、ローム粒子を含む。軟質（柱痕） 第2層：黒褐色土、ローム粒子を含む。第3層：黒褐色土、ロームブロックを含む。
- P 3 第1層：褐色土、ローム粒子を含む。軟質（柱痕） 第2層：黄褐色土、ロームブロックを多く含む。第3層：黒褐色土。
- P 4 第1層：褐色土、ローム粒子を多く含む。軟質（柱痕） 第2層：黒褐色土、ローム粒子、ロームブロックを含む。
- P 5 第1層：暗褐色土、軟質（柱痕） 第2層：黒褐色土、ロームブロック、粘土ブロックを含む。しりりあり。第3層：灰色白土、焼土粒子、粘土を多量に含む。第4層：褐色土、ロームブロックを多く含む。第5層：黒褐色土、粘土粒子を含む。第6層：黒褐色土、ロームブロックを含む。



第29图 第9号孤立柱建筑物(1/60)



第30図 第10号独立柱建物跡 (1/60・1/30)

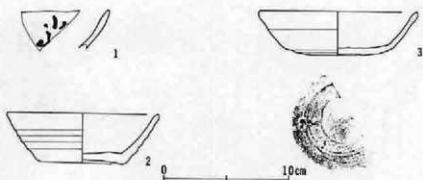
第10号独立柱建物跡柱穴土層注 (第30図)

P6 第1層：黒褐色土、ロームブロックを多量に含む。第2層：暗褐色土。

柱穴間距離は、 P_1-P_2 が1.55m、 P_2-P_3 が1.05m、 P_3-P_4 が1.40m、 P_4-P_5 が1.10m、 P_5-P_6 が1.50m、 P_7-P_6 が3.50mを測る。

出土遺物

遺物は検出されなかった。



第31図 掘立柱建物跡出土遺物 (1/3)

堀跡 (第32図)

本跡は、調査区の東端にて検出された。第8号掘立柱建物跡と重複して、これを切っている。遺構は、黒色土中で確認できた。

断面形状は、葉研形を呈し、途中に段をもっている。ゆるい傾斜で掘り下げ、途中の段から急傾斜させている。底面は平坦である。規模は上幅5.65m、底面の幅1.24m、確認面からの深さ2mを測る。走行方向は、N-1°Wを示す。堀の東側には、肩の部分でつきかためてあり、幅0.60mほどの平坦な部分を造り出している。形の整った掘り方である。

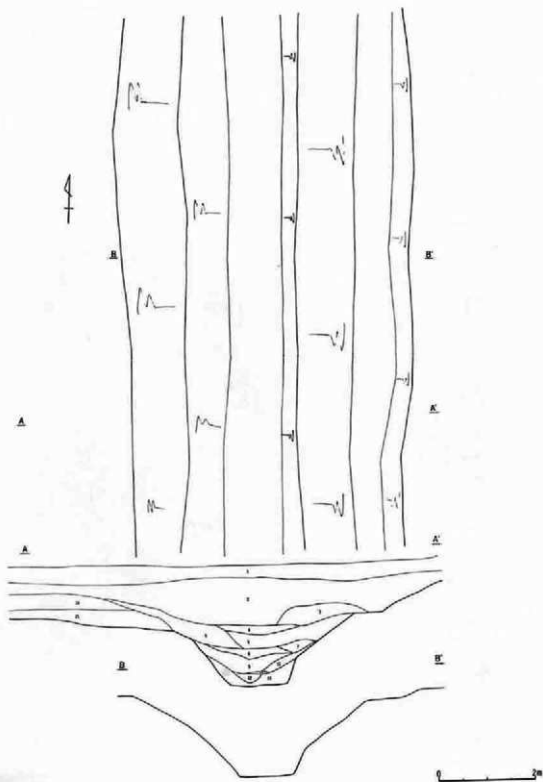
遺物は、確認面から下へ10~50cmの間に集中して検出され、それより下からはほとんど出土しなかった。セクション図の2層下部が相当する。

埋没状況は、遺物が出土する層は、セクション図を見ると大きく分けて4つの底面が認められる。第1番目は、ロームを底面とする部分で、これは掘削当時の面。第2番目は、12・13層の上面で、11層が水が溜った痕跡を残し、10層の流れ込みにより埋没を始めている。第3番目は、9層の上面が相当する。8層は粘土・砂を混じた層で水の堆積を示している。第4番目は4層の上面が相当する。

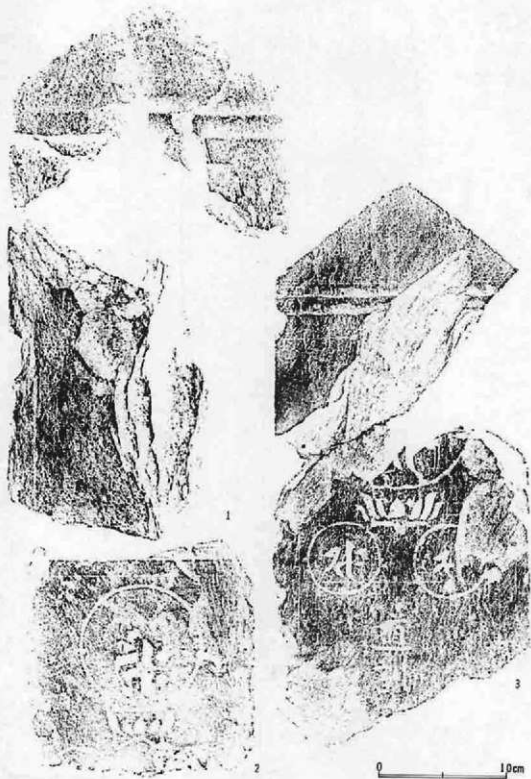
堆積状況は、ほとんどが自然堆積であるが、3層は検出状況、土質から見て人為的なものが感じられる。

堀跡土層注

第1層：褐色土。第2層：褐色土、ローム粒子、ロームブロックを含む。第3層：明褐色土、ローム粒子を多量に含む。かたくしまっている。第4層：暗褐色土、ローム粒子を含む。第5層：暗褐色土、ローム粒子を少し含む。第4層に比べ軟質。第6層：暗褐色土、軟質。第7層：暗褐色土、軟質。第8層：暗褐色土、ローム粒子、黒色土ブロックを含む。粘土を少し含む。砂質（水が溜った様子がある）。第9層：暗褐色土、非常に軟質、砂質、さらさらしている。第10層：黄褐色土、ローム粒子を多く含む。砂質。第11層：砂・ローム粒子が混在した層（水が溜った可能性あり）。第12層：暗褐色土、ローム粒子を多く含む。砂質。第13層：黄褐色土、ロームブロックを多量に含む。砂質。第14層：黒褐色土、遺構確認面。第15層：暗褐色土、(ロームへの漸移層)。



第32圖 堀 跡 (1/80)

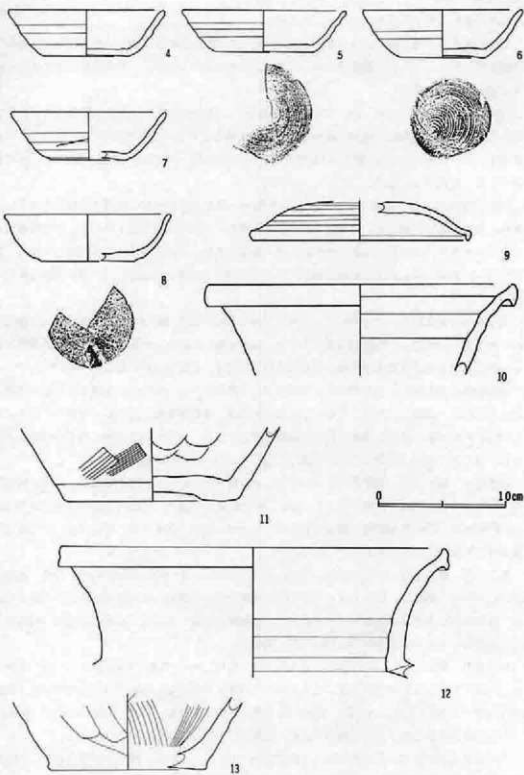


第33图 铜器出土遺物 ① (1/3)

出土遺物

遺物は、覆土上層から多量に出土している。

1. 板碑 現高41.0cm, 幅22.0cm, 厚さ2.3cmを測る。上部から中間部にかけての破片である。主尊種子は欠損しているが、蓮座の一部、二条線、棒線が認められる。一尊の板碑と思われる。石質は堅く、青色を呈する。
2. 板碑 現高20.3cm, 幅18.1cm, 厚さ2.4cmを測る。上部から中間部にかけての破片である。山形は欠損。二条線、月輪、蓮座が認められる。主尊種子はキリーク（阿弥陀）で、その下左に脇侍種子のサク（勢至菩薩）、右にサ（観音菩薩）の一部がそれぞれ認められる。阿弥陀三尊の板碑である。石質は1と同じ。
3. 板碑 現高45.0cm, 幅20.5cm, 厚さ1.7cmを測る。上部から中間部にかけての破片である。二条線、月輪、蓮座を認める。主尊種子は上部が欠損しているが、脇侍種子のサク、サクが認められているのでキリークと思われる。阿弥陀三尊の板碑である。「道調園」の刻みが認められる。彫りは浅い。石質は柔らかく、裏側一面に0.5～1mm程度の磁鉄鉱が散らばっている。黄緑色を呈する。
4. 須恵器環 覆土出土。完存率40%。口径12.2cm, 底径6cm, 器高3.6cmを測る。口径・底径比は0.54を示す。体部は、外斜して立ち上がる。体部は水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。胎土は、白色針状物質を含む。焼成は良好。色調は、青灰色（10B G5/1）を呈する。
5. 須恵器環 覆土出土。完存率50%。口径13.0cm, 底径7.8cm, 器高3.3cmを測る。口径・底径比は0.60を示す。体部は、外斜して立ち上がる。体部は、水引き調整でいいいな作りである。底部は回転糸切り後、外周を回転へう削り調整を施しており、糸切り痕は中央にわずかに残る。胎土は、砂を多く含む。焼成は良好。色調は、灰色（N5/0）を呈する。
6. 須恵器環 覆土出土。完存率60%。口径12.5cm, 底径6.4cm, 器高3.8cmを測る。口径・底径比は0.51を示す。体部は、外斜して立ち上がる。体部は水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。体部外面に不整合が認められる。胎土は、白色針状物質・砂を含む。焼成は良好。色調は、灰白色（7.5 Y5/1）を呈する。
7. 須恵器環 覆土出土。完存率30%。口径12.1cm, 底径6.0cm, 器高3.8cmを測る。口径・底径比は0.49を示す。体部は、外斜して立ち上がる。体部は水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。体部外面に不整合が認められる。胎土は、白色針状物質・5mm大の石が含まれる。焼成は良好。色調は、オリーブ灰白色（2.5 G Y5/1）を呈する。
8. 須恵器環 覆土出土。完存率40%。口径13.1cm, 底径7.4cm, 器高3.7cmを測る。口径・底径比は、0.56を示す。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁は外反する。体部は水引き調整だが、雑な作りで凹凸がたくさんある。底部は、回転糸切り後に外周部を回転へう削り調整している。胎土は白色針状物質・砂を多く含む。焼成は良好。色調は、灰白色（2.5 Y7/1）を呈する。
9. 須恵器蓋 覆土出土。完存率40%。口径17.0cm, 現高3cmを測る。体部は水引き調整、天井部は回転へう削り調整である。胎土は砂を含む。焼成は良好。色調は、青灰色（5 B5/1）を呈する。
10. 須恵器裏 覆土出土。口縁破片。口径24cmを測る。大きく外反する。全体がナテ調整。胎土は、



第34圖 堀跡出土遺物 ② (1/3)

砂を多く含む。焼成は良好。色調は、外面が灰白(7.5Y6/1)、その他が灰色(5Y5/1)を呈する。

11. 須恵器甕 覆土出土。底部破片。底径14cmを測る。胴部は、外斜して立ち上がる。胴部外面は、底部から2cm上までがへう削り、その上はタタキである。内面にはあて具痕が残る。底部外面の中央部に、径7.5cmのくぼみがある。この中に、成形時に当てられていたものしわが残されていた。このくぼみは、恐らく成形台(ロクロ・回転台)上にあった突出部によって作られたもので、台の中央部の回転軸上にあったものであろう。胎土は、砂を含む。焼成は良好。色調は、灰色(7.5Y6/1)を呈する。
12. 須恵器甕 覆土出土。口縁部破片。口径30.2cmを測る。頸部が鋭く「く」の字状に外反する。口縁端部は、シャープな作りである。全面にわたリナテ調整を施す。頸部の断面に不整合が認められる。これは、胴部を成形し、しばらく乾燥した後には口縁部を成形したためと思われる。外面に自然釉が認められる。胎土は、砂を含む。焼成は良好。色調は、灰白色(7.5Y6/1)を呈する。
13. すり鉢 覆土出土。底部破片。底径12cmを測る。内面に7本の沈線による使用面が認められた。底部外面は回転糸切り未調整、胴部はナテつけである。胎土は、砂・雲母を含む。焼成は良好、軟質である。色調は、黒色(N2/0)を呈する。
14. 須恵器鉢 覆土出土。完存率40%。口径46.9cm、底径18.8cm、器高27.6cmを測る。胴部が内湾気味に立ち上がり、口縁部は屈曲して外反する。外面は、底部から上へ5cmまでがへう削りを施した後にナテ、上位は水引き調整である。内面はナテ調整。底部外面にへう記号が認められる。胎土は、白色針状物質・5mm大の石を多量に含む。焼成は良好。色調は、灰色(10Y6/1)を呈する。

本跡に伴う遺物は、1～3の板碑と13のすり鉢であり、他は、本跡が破壊した第6・8号掘立柱建物跡のものと思われる。

集石(第36図)

本跡は、調査区の南東にて検出した。堀跡の確認面と同一レベルで確認した。

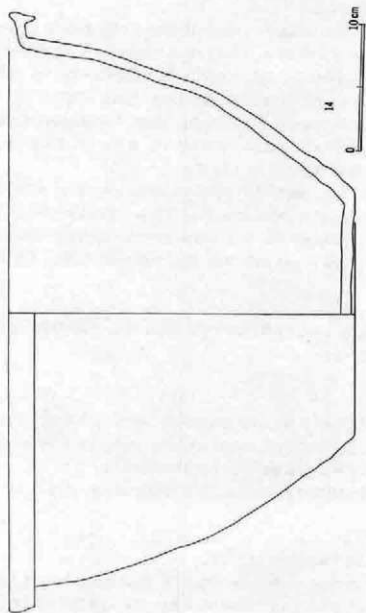
範囲の規模は、約3mを測る。石は30cm大のものから5cm大のものまで様々で、配置等の規則は認められなかった。掘り込みは検出せず、石の出土状況は同一レベルである。

遺物は、石と石の間にはさまって出土しており、規則性は認められない。

出土遺物(第37図)

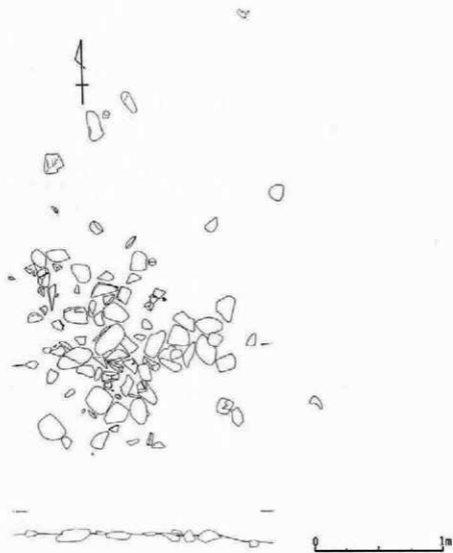
遺物は、須恵器坏・埴・甕が出土している。

1. 須恵器坏 完存率40%。口径11.9cm、底径6.4cm、器高3.4cmを測る。口径・底径比は0.53を示す。体部は外斜して立ち上がる。体部は水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。胎土は、砂を多く含む。焼成は良好。色調は、灰白色(2.5GY8/1)を呈する。
2. 須恵器埴 完存率60%。底径8.5cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がる。水引き調整。底部

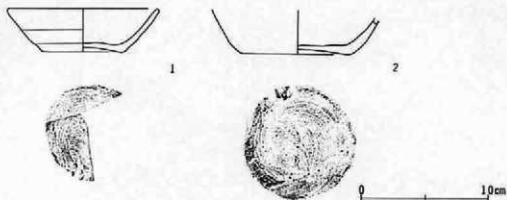


第35図 堀野出土遺物 ③ (1/3)

は、回転糸切り未調整である。胎土は、1cm大の石を含む。焼成は良好。色調は、灰色（7.5 Y 6/1）を呈する。



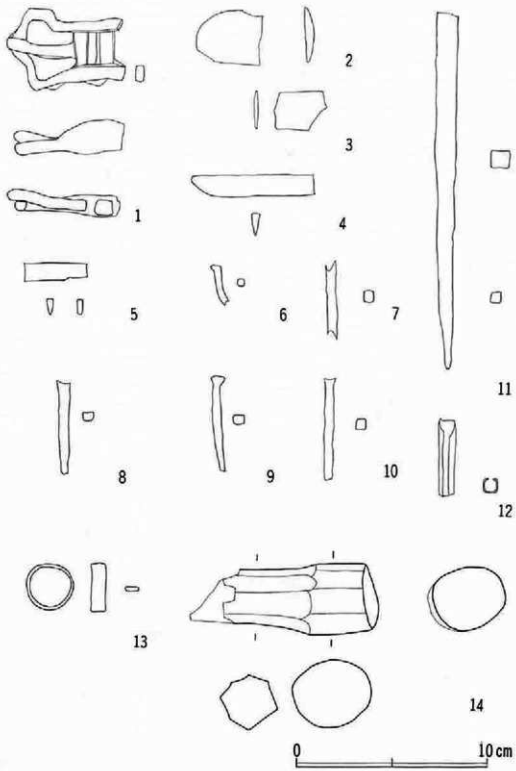
第36図 集石 (1/30)



第37図 墓石出土遺物 (1/3)

木・鉄製品 (第38図)

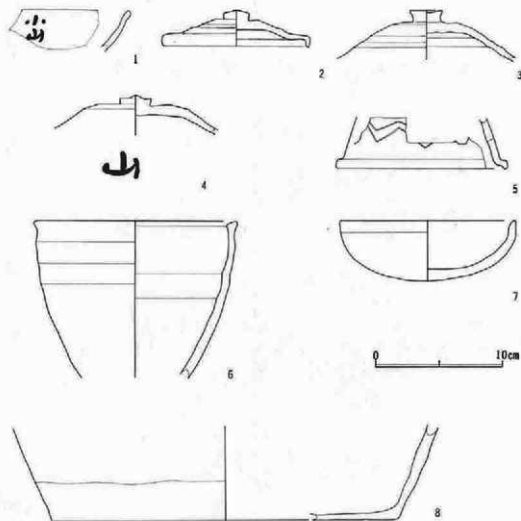
1. 鉾具 第1号住居跡No.6 出土。完存率90%。長さ6.1cm, 幅4.5cmを測る。遺存状態は不良。
- 2・3. 鉾尾 第1号住居跡覆土出土。幅2.9cm, 厚さ0.4cmを測る。片面は平らで、片面がふくらんでいる。遺存状態は良好。
4. 刀子 第2号掘立柱建物跡P1 出土。現存長6.5cm, 幅1.1cmを測る。
5. 刀子 5次調査区表土出土。刃部幅0.9cmを測る。
6. 釘 第3号住居跡出土。長さ1.9cm, 太さ0.3cmを測る。断面形状は長方形を呈する。
7. 棒 第3号住居跡出土。長さ3.9cm, 太さ0.5cmを測る。断面形状は矩形を呈する。
8. 釘 3次調査区表土出土。太さ0.5cmを測る。断面形状は矩形を呈する。
9. 釘 5次調査区表土出土。太さ0.6cmを測る。断面形状は矩形を呈する。
10. 棒 第1号住居跡出土。長さ5.2cm, 太さ0.5cmを測る。断面形状は矩形を呈する。
11. 釘 第4号掘立柱建物跡P4 出土。現存長18.5cm, 太さ1.0cmを測る。断面形状は矩形を呈する。
12. 不明製品 第1号住居跡出土。長さ4cm, 太さ0.7cmを測る。
13. 環 3次調査区表土出土。直径2.5cm, 幅0.7cm, 厚さ0.2cmを測る。
14. 柄 木製品 第1号住居跡出土。長さ7cm, 太さ4.7cmを測る。にぎりの部分は、刃物で面取りされている。炭化しており遺存状態は良好である。刀子等の金属製品の柄と思われる。



第36圖 木・鉄製品 (1/2)

表土出土遺物 (第39図)

1. 須恵器坏 2次調査区出土。口縁部破片。外面に墨書が認められ、「小山」と読める。胎土は精良。焼成は良好。色調は、明赤褐色 (2.5Y R5/6) を呈する。
2. 須恵器蓋 5次調査区出土。完存率40%。口径11.5cm、器高2.8cm、つまみ径2.0cmを測る。小型で肉厚である。体部は水引き調整、天井部は回転へう削り調整を施す。胎土は、1cm大の石を含む。焼成は良好。色調は、にぶい橙色 (5Y R6/4) を呈する。
3. 須恵器蓋 5次調査区出土。完存率30%。つまみ径2.5cmを測る。つまみは貼り付け、体部は水引き調整である。胎土は、白色針状物質を多量に含む。焼成は良好。色調は、灰色 (N5/0) を呈する。



第39図 表土出土遺物 (1/3)

4. 須恵器蓋 5次調査区出土。完存率50%。つまみ径2.4cmを測る。つまみは貼り付け。体部は水引き調整、天井部は回転へラ削り調整を施す。体部外面に墨書が認められ、「山」と読める。胎土は、砂を多く含む。焼成は良好。色調は、灰白色(10Y8/2)を呈する。
5. 須恵器碗 5次調査区出土。円面碗の脚部破片。底径13.3cmを測る。外面に2本の沈線による装飾が施されている。また、へラにより焼成前に切り込まれた窓がある。外面に釉が付着して光沢をもっている。胎土は、砂を含む。焼成は良好。色調は、灰色(5Y4/1)を呈する。
6. 須恵器鉢 5次調査区出土。完存率40%。口径16cmを測る。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部が肥厚する。体部は水引き調整を施す。外面に釉が付着して器表面が荒れている。胎土は砂を少量含む。焼成は良好。高温で焼かれたために表面が海绵状となり、黒色のハン点かかっている。色調は、地が灰色(N9/0)、釉は緑灰白色(7.5GY5/1)を呈する。
7. 土師器杯 5次調査区出土。完存率90%。口径13.6cm、器高4.8cmを測る。半球形の器形で、口縁部が直立する。丸底だが安定している。口縁部は横ナテ調整、体部外面はへラ削り後ナテ、内面はナテ調整である。胎土は、砂を含む。焼成は良好。色調は、明赤褐色(2.5YR5/6)を呈する。
8. 内耳土器 5次調査区出土。破片。底径27.6cmを測る。胴部は直立気味に立ち上がる。外面下部はナテ調整。胎土は、砂を多く含む。焼成は良好。色調は、胴部外面が黒色(N2/0)、その他がよい橙色(7.5YR7/4)を呈する。

第4章 宮ノ越遺跡2次の調査

第1節 調査経過

昭和60年

12月18日 グリッドを40個設定し、調査を開始。(う・お・き-1) Gを掘削。ローム面までの深さは30~40cmであった。

12月19日 (う・お・き-3・5) Gを掘削。う・きの列でいくつかの遺構を検出。

12月20日 (う・お・き-7・9) Gを掘削。(う-9) Gで大きな黒色土のプランを検出。

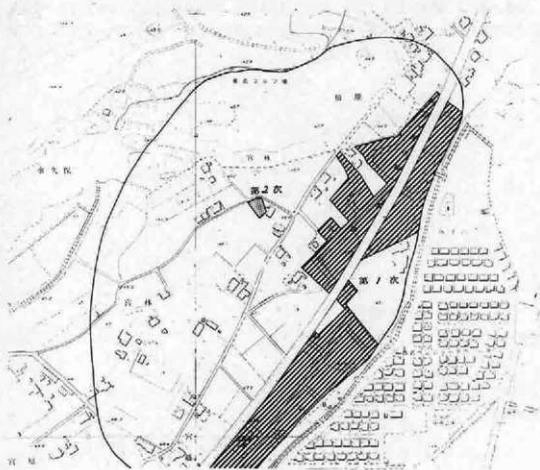
12月21日 (あ-お-1-9) Gの拡張を決定し、各グリッドを掘削。排土は、遺構を検出しなかったグリッドに入れて埋めもどした。

12月22日 グリッドの拡張を実施。(あ-お-1-6) Gで多数の柱穴を検出した。

12月24日 グリッドの拡張を実施。(あ-う-7-9) Gで住居跡を検出。第66号住居跡とした。

昭和61年

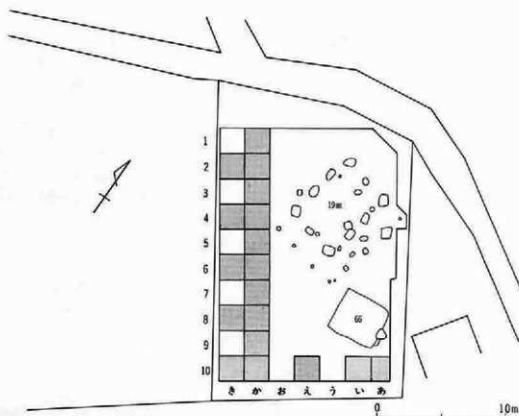
1月7日 グリッドの拡張。(あ-お-1-6) Gで検出した柱穴群は、掘立柱建物跡と判明した



第40図 宮ノ越遺跡周辺の地形図 (1/5,000)

ので、19号とした。

- 1月8日 第66号住居跡の調査。4分割して掘り下げ、50cmの深さで床面検出。第19号掘立柱建物跡の調査。プランを精査したところ、2間×3間の規模で東と南の2面廂の建物と判明。
- 1月9日 第19号掘立柱建物跡の調査。柱穴を5cm掘り下げて柱痕の検出につとめたが、検出されなかった。第66号住居跡からは、須恵器が多く出土。
- 1月10日 第19号掘立柱建物跡を精査し、写真撮影を実施。第66号住居跡は、遺物出土状態図作成。
- 1月11日 第19号掘立柱建物跡の平面図作成。第66号住居跡遺物出土状態の写真撮影。
- 1月13日 第66号住居跡の遺物を取り上げる。第19号掘立柱建物跡のエレベーション図作成。
- 1月14日 第66号住居跡の床面を精査して柱穴・壁溝の検出に努めた。
- 1月16日 第66号住居跡の各種図面作成。第19号掘立柱建物跡のエレベーション図を作成。
- 1月17日 第66号住居跡の写真撮影を実施後、カマドを切開して図面作成。調査区の全景写真撮影。
- 1月18日 全測図を作成して、調査を終了する。



第41図 宮ノ越遺跡全測図 (1/300)

第2節 遺跡の概要

遺跡は、西武新宿線狭山市駅から北へ直線距離で約3.5kmの地点に所在し、入間川左岸の台地上に位置する。台地上は、おおむね平坦である。標高は、西端が48m、東端が44mで、入間川の沖積地との境いは急崖を形成し、比高差は10mを測る。台地の北側には、入間川とおおむね平行に谷が入り、水田耕作の遺地となっている。台地上との比高差は、約2mを測る。

分布調査による遺跡の範囲は、640×390m、面積にして175,000㎡を測る。奈良・平安時代の集落遺跡である。昭和53・54年に埼玉県遺跡調査会が、宅地造成に伴い発掘調査を実施している。その結果、奈良・平安時代の竪穴住居跡65軒、掘立柱建物跡18棟、竪跡3基が発見されている。

調査区は長方形を呈し、東西15m、南北25m、面積375㎡の規模である。遺跡の北部に位置し、1次調査区の西70mに所在する。調査方法は、北東隅を基点として2×2mのグリッドを70個設定し、4つに1つの割合で手掘りで行った。グリッド名は、南北を数字、東西を五十音とし、(〇-〇)Gと呼称した。

検出した遺構は、奈良・平安時代の竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟である。

第3節 遺構と遺物

第66号住居跡(第42・43図)

本跡は、調査区の南端に位置する。西に1m離れて第19号掘立柱建物跡が所在する。

平面形態は、長方形を呈する。規模は東西3.97m、南北3.32m、床面積13.1㎡を測る。主軸方位は、N-93°-Eを示す。壁体は、ほぼ垂直に42cm立ち上がる。壁溝は幅24cm、深さ13cmの規模で巡る。柱穴は、2個検出した。カマド右脇の壁溝に接した部分に1つと、ここの反対側壁の壁溝に接した部分に1つである。

カマドは、東壁の中央に左袖がくるところに位置する。規模は幅0.90m、長さ1.01mを測る。構築用材は灰白色粘土で、2層が相当する。底面は、よく焼けており赤褐色を呈する。

カマドの右脇にローム層を5～8cm程掘り下げて灰白色粘土を貼っている遺構を検出した。調査前では、カマドの幅が大きいものと思われたが、カマドの調査を進めていくうちにこの遺構のプランが判明した。規模は幅0.65m、奥行0.35mを測る。入口施設と思われる。

遺物は、床面上にはほとんどなく、覆土中から出土している。

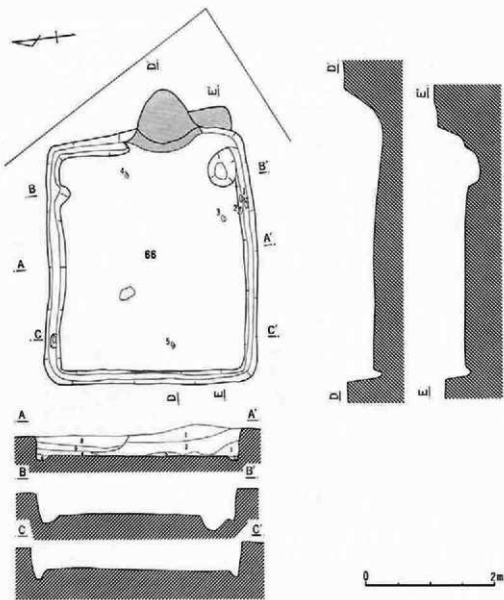
出土遺物(第44図)

遺物は、須恵器環・甕、土師器甕が出土している。図化できたものは少なく、以下に記述する。

1. 須恵器環 No.1 出土。完存率95%。口径13.0cm、底径5.6cm、器高4.3cmを測る。口径・底径比

第66号住居跡土層注(第42図)

第1層：黄褐色土、ローム粒子、ロームブロックを多く含む。第2層：暗褐色土、焼土粒子、ローム粒子を多く含む。第3層：黒褐色土。第4層：黒褐色土、ローム粒子を含む。第5層：黄褐色土、ローム粒子、ロームブロックを含む。焼土粒子を多く含む。第6層：黄褐色土、ローム三角堆積。第7層：第6層と同じ。第8層：褐色土、ロームブロックを含む。攪乱層。第9層：褐色土、非常にかたい層、攪乱層。



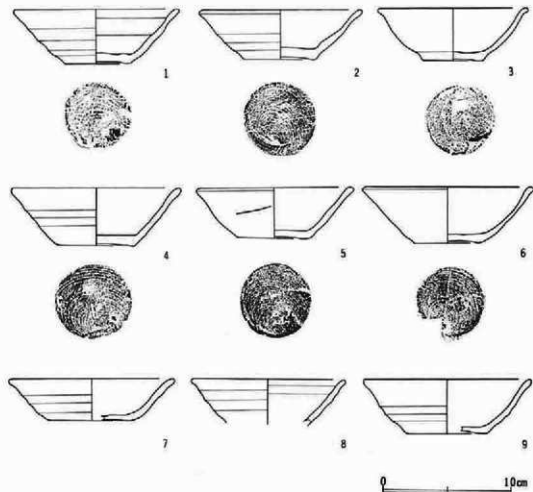
第42图 第66号住居跡 (1/60)

糸切り未調整である。ロクロは右回転。胎土は、5mm大の石を含む。焼成は良好。色調は、オリ
ーフ灰色(2.5GY6/1)を呈する。

4. 須恵器 甕 No.2 出土。完存率70%。口径13.4cm, 底径5.9cm, 器高4.5cmを測る。口径・底径比
は0.44を示す。体部は外斜して立ち上がり、口縁はゆるく外反する。体部は、水引き調整、底部
は回転糸切り未調整である。胎土は、5mm大の石を含む。焼成は良好。色調は、底部の内外面が
赤橙色(10R6/0)、その他の部分が灰色(5Y5/1)を呈する。

5. 須恵器 甕 No.5 出土。完存率75%。口径12.4cm, 底径6.0cm, 器高3.9cmを測る。口径・底径比
は0.48を示す。体部は外斜して立ち上がる。体部は水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。
ロクロは右回転。体部外面に不整合が認められる。胎土は、5~10mm大の石を多く含む。焼成は
良好。色調は、灰色(N6/6)を呈する。

6. 須恵器 甕 カマド内出土。完存率75%。口径13.5cm, 底径5.0cm, 器高4.4cmを測る。口径・底



第44図 第66号住居跡出土遺物(1/3)

径比は0.37を示す。体部は内湾気味に立ち上がり、肥厚した口縁が外反する。体部は水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。ロクロは右回転。胎土は、5mm大の石を含む。焼成は良好。色調は、灰色(N5/0)を呈する。

7. 須恵器環 b区覆土下出土。完存率40%。口径13.0cm、底径6.6cm、器高3.3cmを測る。口径・底径比は0.50を示す。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁は外反する。体部は水引き調整で雑な作りである。底部は回転糸切り未調整。胎土は、5mm大の石を多く含む。焼成は良好。色調は、青灰色(10B G5/1)を呈する。

8. 須恵器環 b区覆土出土。完存率40%。口径12.2cmを測る。体部は外斜して立ち上がる。水引き調整。体部と底部との接合部分に糸切り痕が残っている。胎土は、砂を含む。焼成は良好。色調は、灰色(7.5Y 6/1)を呈する。

9. 須恵器環 覆土出土。完存率30%。口径13.1cm、底径6.2cm、器高4.3cmを測る。口径・底径比は0.47を示す。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はゆるく外反する。体部は水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。ロクロ右回転。胎土は、砂を含む。焼成は不良。色調は、底部の内外面が淡黄褐色(7.5Y R8/6)、その他の部分が淡黄色(5 Y 8/3)を呈する。

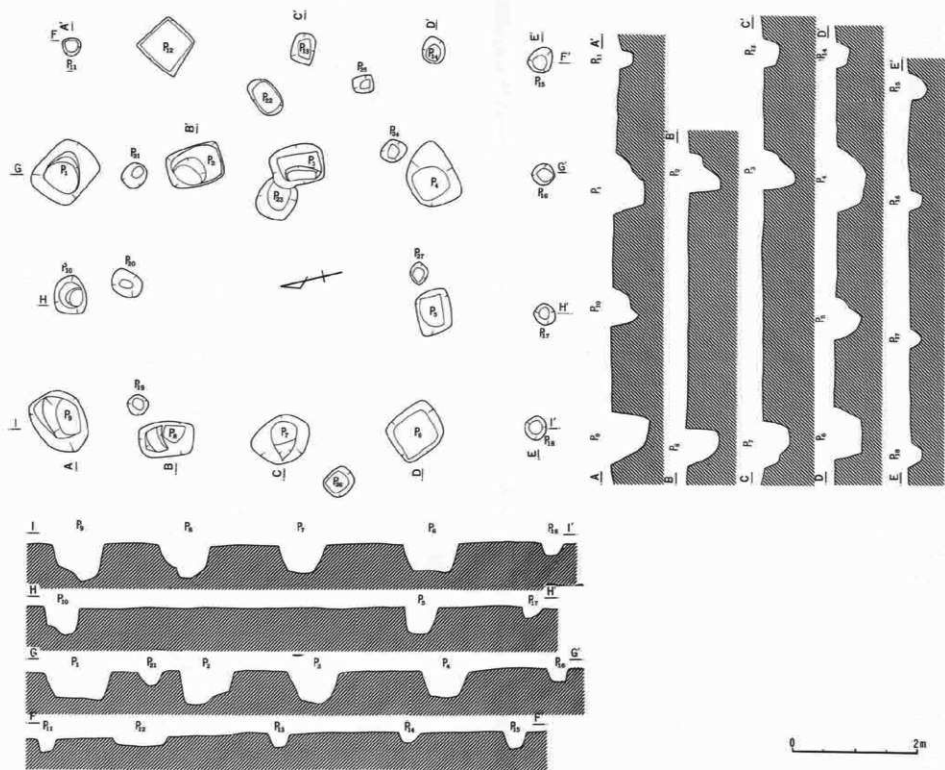
第19号掘立柱建物跡(第45図)

本跡は、調査区の中央にて検出した。第66号住居跡と1mの距離がある。

平面形態は、長方形を呈する。規模は東西2間(4.40m)、南北3間(6.30)、面積27.72m²を測る。東と南の2面に廂が付く。主軸方位は、N-15°-Eを示す。柱穴は、18個検出した。各コーナーに位置する柱穴は、他の柱穴が列に並行に長軸をとるのに対して、長軸の向きがかわっている。柱穴の平面形態は、本体が方形を主とし、廂が円形を主としている。規模は、本体が長軸70~100cm、短軸54~80cm、深さ40~55cm、廂が径40~70cm、深さ15~30cmを測る。

	形状	大きさ	深さ	その他	形状	大きさ	深さ	その他
P 1	長方形	100×80cm	50cm		P 2	長方形	85×60cm	55cm
P 3	長方形	84×60cm	46cm		P 4	長方形	100×80cm	47cm
P 5	長方形	70×50cm	44cm		P 6	長方形	80×74cm	40cm
P 7	円形	直径 80cm	42cm		P 8	長方形	84×54cm	54cm
P 9	長方形	100×80cm	53cm		P 10	円形	直径 80cm	44cm
P 11	円形	直径 30cm	20cm		P 12	正方形	70×70cm	15cm
P 13	長方形	50×40cm	30cm		P 14	円形	直径 40cm	25cm
P 15	円形	直径 40cm	22cm		P 16	円形	直径 40cm	23cm
P 17	円形	直径 40cm	20cm		P 18	円形	直径 40cm	20cm

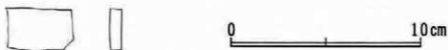
柱穴間距離は、P₁-P₂が1.10m、P₂-P₃が0.75m、P₃-P₄が1.35m、P₄-P₅が1.30m、P₅-P₆が1.05m、P₆-P₇が1.21m、P₇-P₈が0.90m、P₈-P₉が0.85m、P₉-P₁₀が1.28m、P₁₀-P₁₁が1.12m、P₁₁-P₁₂が1.30m、P₁₂-P₁₃が1.70m、P₁₃-P₁₄が1.30m、P₁₄-P₁₅が1.45m、P₁₅-P₁₆が1.90m、P₁₆-P₁₇が1.48m、P₁₇-P₁₈が1.30mをそれぞれ測る。



第45图 第19号孤立柱建筑物(1/60)

出土遺物（第46図）

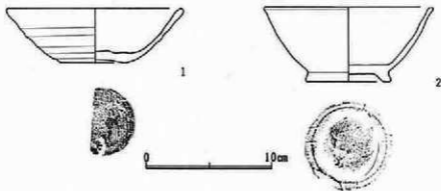
鉄製の板が1点P₁から出土している。幅2.1cm、厚さ0.6cmを測る。2枚に割離しようとしている。遺存状態は不良。用途は不明。



第46図 第19号掘立柱建物跡出土鉄製品（1/2）

表土出土遺物（第47図）

1. 須恵器坏 イー4グリッド出土。完存率40%。口径14.0cm、底径5.0cm、器高4.3cmを測る。口径・底径比は0.35を示す。体部は外斜して立ち上がる。体部は水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。胎土は、1cm大の石を含む。焼成は良好。色調は、灰オリーブ色（7.5Y6/2）を呈する。
2. 須恵器高台付坏 アー5・イー5グリッド出土。完存率40%。口径13.2cm、器高5.8cm、高台径6.6cm、高台高0.6cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁はゆるく外反する。体部は水引き調整、底部は回転糸切り未調整である。高台は貼り付け。胎土は、5~10mm大の石を多く含む。焼成は良好。色調は、オリーブ灰色（2.5GY5/1）を呈する。



第47図 表土出土遺物（1/3）

第5章 中原遺跡の調査

第1節 調査経過

昭和60年

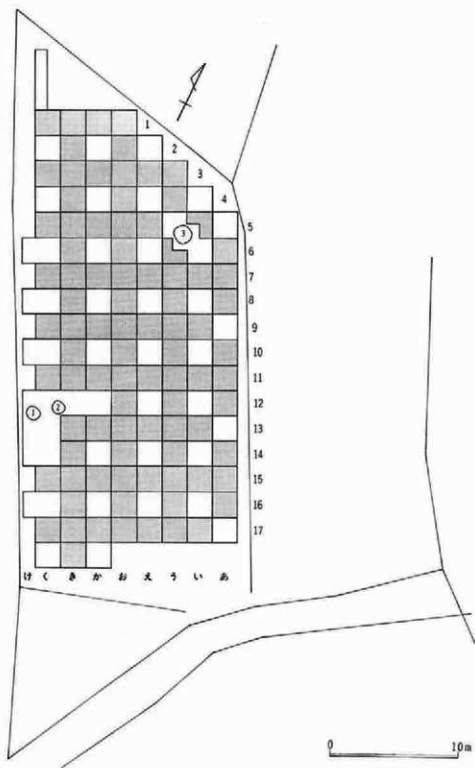
- 9月9日 グリッドを設定して調査を開始。標高の移動を実施。
9月10日 (7-15-あ-き) Gを掘削して遺構確認を行った。表土下30cmでローム面であった。
9月12日 (2-8-あ-き) Gを掘削して遺構確認を実施。(あ-6) Gで土塚を2基検出した。
9月13日 グリッドを掘削し、遺構確認を実施。(く-12) Gにて土塚を検出。周囲のグリッドを拡張。
9月14日 遺構の調査。各遺構とも全掘し、各種図面を作成、写真撮影を実施。全体測量を実施。
9月17日 埋めもどしをして、調査を終了。

第2節 遺跡の概要

遺跡は、西武新宿線狹山市駅から北東へ直線距離で約1.2kmの地点に所在し、入間川右岸の台地上に位置する。右岸台地上は、中小河川により開折された浅い谷が幾筋もあり、本遺跡も狹山市立入



第48図 中原遺跡周辺の地形図 (1/5,000)



第49図 中原遺跡全測図 (1/300)

間川東小学校付近に水源をもつ久保川に開析された谷の左岸に位置する。標高は、52~58mを測る。

分布調査による遺跡の範囲は、880×370m、面積にして245,000㎡を測る。縄文時代早期・前期・中期・後期、奈良・平安時代の集落遺跡である。調査区は、遺跡の東端に位置する。長方形を呈し、東西16m、南北32m、面積512㎡を測る。標高は56mで、南側がすぐ傾斜して久保川へと至る。

調査方法は、北東隅を基点として2×2mのグリッドを112個設定し、手掘りで行った。グリッド名は南北を数字、東西を五十音として、(○-○)Gと呼称した。

第3節 遺構と遺物

1号土壇(第50図)

調査区の西端に位置し、2号土壇と近接している。

平面形態は、円形を呈する。規模は直径1.05m、深さ0.10mを測る。底面は、平坦である。出土遺物はない。

2号土壇(第50図)

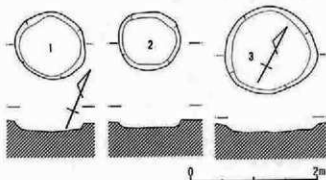
調査区の西端に位置し、1号土壇と近接している。

平面形態は、ほぼ円形を呈する。規模は直径1.00m、深さ0.13mを測る。底面は平坦である。出土遺物はない。

3号土壇(第50図)

調査区の東北に位置している。

平面形態は、ほぼ円形を呈する。規模は直径1.40m、深さ0.10mを測る。底面は、平坦である。出土遺物はない。



第50図 土壇(1/60)

第6章 揚楯木遺跡7・9次の調査

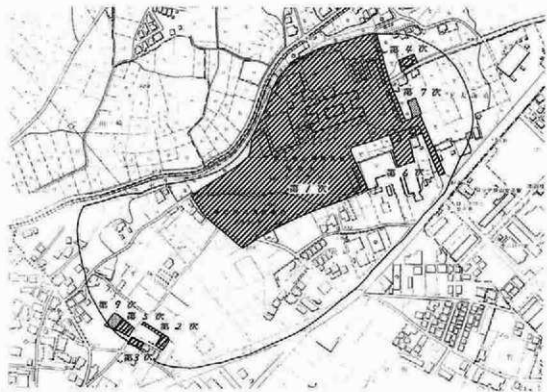
第1節 調査経過

7次調査（昭和60年）

- 8月12日 調査器材を搬入、くい打ちを実施。現況の写真撮影。
- 8月13日 調査区内の除草を実施後、グリッドを設定して掘削を開始する。
- 8月14日 グリッドを4つに1つの割合で掘削。
- 8月15日 予定数のグリッドの掘削を終了。補足的に数グリッドを掘削。
- 8月16日 全体の写真撮影、全体測量を実施。
- 8月19日 重機（バックホー）を導入して埋めもどしを実施。

9次調査（昭和61年）

- 2月4日 前日に降った雪を除去してグリッドを設定。4つに1つの割合で掘削。
- 2月5日 予定数のグリッドの掘削を終了。写真撮影、全体測量図作成後埋めもどしを実施。



第51図 揚楯木遺跡周辺の地形図（1/5,000）

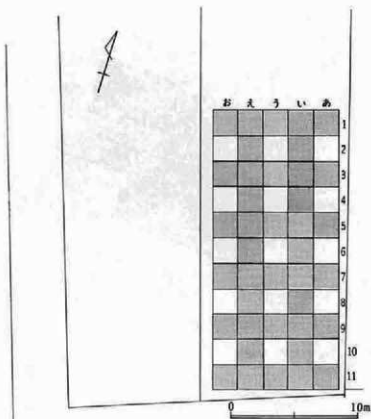
第2節 遺跡の概要

本遺跡は、西武新宿線秩山市駅から北東へ直線距離で約2.3kmの地点、入間川右岸の武蔵野台地縁辺に位置する。この付近の標高は約50mで、入間川の沖積地との比高差は約8mを測る。遺跡周囲の微地形は、東と南が2m、西側が1mほど高くなっているため遺跡は北へ開口する半円形の窪地に占地している。

分布調査による遺跡の範囲は500×450m、面積にして168,000㎡を測る。縄文時代前期・中期と奈良・平安時代の集落遺跡である。現在まで6次の調査を実施して、縄文時代前期の住居跡9軒、同中期の住居跡2軒、奈良・平安時代の住居跡79軒、掘立柱建物跡13棟、土壇墓3基が検出されている。

7次調査区は、1次調査区に接しており、遺跡の東端に位置している。地目は畑である。調査区は、南北に長い長方形を呈している。規模は東西11m、南北24mを測る。調査方法は、北東隅のクイを基点として2×2mのグリッドを55個設定して手掘りで行った。

9次調査区は、5次調査区の南に接しており、遺跡の西端に位置している。地目は畑である。調査区は、東西に長い長方形を呈している。規模は東西17m、南北22mを測る。調査方法は、北東隅のクイを基点として2×2mのグリッドを63個設定し、手掘りで行った。



第52図 揚植木遺跡7次全測図(1/300)

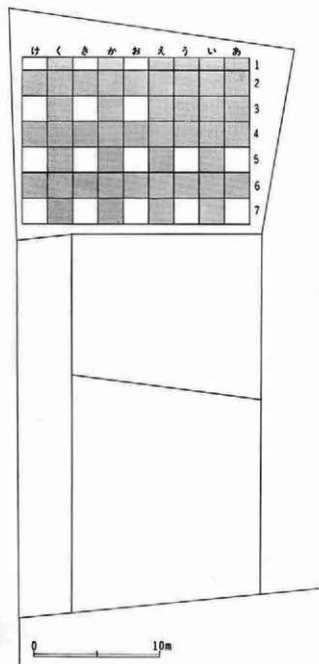
第3節 遺構と遺物

7次調査

遺構・遺物とも検出しなかった。

9次調査

遺構・遺物とも検出しなかった。



第53図
得植木遺跡9次全測図
(1/300)

第7章 御所の内遺跡3次の調査

第1節 調査経過

昭和61年

- 1月11日 グリッドを設定し、4つに1つの割合で掘削を開始。
- 1月13日 グリッドの掘削、遺構確認を実施。
- 1月14日 グリッドの掘削終了。埋めもどしを実施して調査を終了。



第54図 御所の内遺跡の周辺地形図(1/5,000)

第2節 遺跡の概要

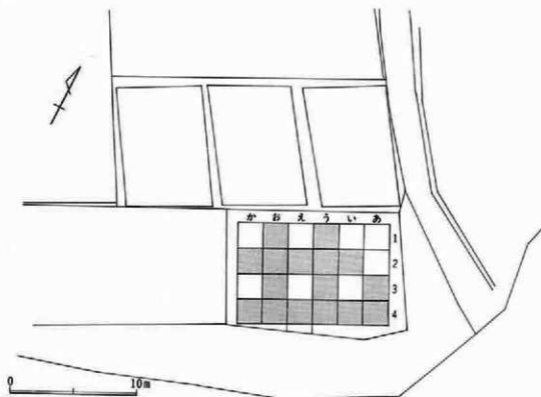
遺跡は、西武新宿線狭山市駅から北西へ直線距離で約2.2kmの地点に所在し、入間川左岸台地上に位置している。標高は西端が55m、東端が50mで、入間川沖積地との境は急崖を形成して比高差12mを測る。台地上はおおむね平坦で、北東に向けてゆるく傾斜して低くなっている。

分布調査による遺跡の範囲は、540×290m、面積にして102,000㎡を測る。奈良・平安時代の集落跡である。

調査区は東西9m、南北14m、長方形を呈しており、入間川沖積地を臨む台地の縁辺に位置している。調査方法は、北東隅のクイを基点として2×2mのグリッドを設定し、4つに1つの割合で手掘りを行った。グリッド名は南北が数字、東西が五十音とし、(○-○)Gで表した。

第3節 遺構と遺物

遺構・遺物とも検出しなかった。



第55図 御所の内遺跡3次全測図(1/300)

第8章 結 語

本書では、5遺跡9調査で得られた成果を取めたもので、それについて前章で詳述したところである。本章では、その中で遺構と遺物を検出した小山ノ上遺跡・宮ノ越遺跡についてまとめをしておこう。

第1節 小山ノ上遺跡

当遺跡は、4次にあたり総面積3,084㎡を調査し、竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡10棟、堀跡1条、集石1基を検出した。2・3次の調査に重って県道建設に先立ち埼玉県埋蔵文化財調査事業団が調査(注1)を実施して、竪穴住居跡19軒、掘立柱建物跡5棟、堀跡1条、柵列1基を検出している。(坂野 1986・中村 1987)合計すると竪穴住居跡23軒、掘立柱建物跡15棟、堀跡1条、柵列1基となる。

遺 構

竪穴住居跡と掘立柱建物跡とは占拠する場所が異なっている。掘立柱建物跡は周囲より低い谷底とその斜面に占拠し、3次調査区の所在する高台では1棟も検出されなかった。竪穴住居跡は、この谷底でも1軒検出したが主体となるのは高台である。

堀跡は、5次調査区から北に向けてのびているが、北側の道路を挟んで所在する2次調査区では検出されていない。この道路を東に約150m進んだ所で切り通し部分があり、これが整った溝研形を呈しているもの。もしかすると、ここに通じているのではないかと考えられる。

〔竪穴住居跡〕

4軒検出したが、規模及び主軸方位は同じものがなかった。施設では、壁溝が第1・3旧号住居跡にて検出、第3新・4号住居跡では検出されなかった。柱穴は、各住居跡とも検出されているが、住居内での規則的配置は認められなかった。ただ、第2・3旧号住居跡では壁溝と接しているものもあり、壁体と柱穴の関係を窺わせるものがある。カマドは、第1・2・3新号住居跡で検出した。第2号住居跡は、北カマドで調査区域に所在し、住居内にカマドが崩落した時の粘土を検出したのにとどまり全容は不明である。第1・3新号住居跡はいずれも東カマドで、壁体の中央部に左側軸が位置するような配置をしている。両者とも崩落して原形を留めていない。床面は、第2・3旧住居跡以外は軟弱であった。

第1・3号住居跡は、伴に炭化材・焼土が検出された。その状況から火災にあったことを示している。第1号住居跡では、炭化材・炭化物が多く遺存していて焼土はあまり多く遺存していなかったが、第3号住居跡はその逆に焼土が多量に遺存していた。この状況からそれぞれの住居跡では火災時の状況、消火の状況が異なっているようである。

〔掘立柱建物跡〕

10棟検出したなかで完掘できたものは少なく、一部分を推定できるものも含めて第1～3・6・8号掘立柱建物跡の5棟だけであった。しかしながら、完掘できなかったものの建物の向きや柱穴の個々をとりだしてみると、いくつかの所見が得られた。

建物跡の規模は、間取りで2間×3間、柱穴数10個が主体としてあり、第1～3・6号掘立柱建物跡がそれである。第10号掘立柱建物跡も柱穴の配置からみてその可能性は大であり、これを含めて5棟を数える。距離では、梁行は4.00～4.85mと差があまりないが、桁行は4.50～7.50mと差が大きくていて、第2号掘立柱建物跡は、2間×3間の間取りではあるが、桁行と梁行との差が30cmほどしかなく、全体が正方形に近い平面形態をしている。

柱穴は、平面形態が円形・楕円形・長方形等のいろいろな形が確認された。遺構を検出した面が傾斜地や黒色土が厚く堆積したところであったため、柱穴の底面に近いところを検出したのでプランが円形や楕円形であったりしたものと思われる。これは、第3号掘立柱建物跡が傾斜面に所在して、斜面の上方に位置する柱穴は長方形プランだが、斜面の下方に位置する柱穴は円形プランを呈していることによく現わされている。柱穴の掘り方が長方形であればこのような事にはならないが、掘り始めが長方形であっても底面近くでは、丸くなってしまふようである。従って、基本プランは、長方形と思われる。規模は、第2・4・7号掘立柱建物跡の柱穴が大きく1m以上を測り、以下に第1・6号掘立柱建物跡が1m前後、第5・8・9号掘立柱建物跡が70～80cm、第10号掘立柱建物跡が50cm大となっている。柱穴の向きは、特徴的なものが認められた。各コーナーに位置する柱穴が、建物の長軸に対して斜めを向くもので第1～4・6・9号掘立柱建物跡で認められた。第7号掘立柱建物跡のP₆及び、宮ノ越遺跡第6号掘立柱建物跡(小川 1982)、城ノ越遺跡第1号掘立柱建物跡(増田 1978)のコーナー部柱穴は「鉤型」を呈しており、本遺跡の事例はそれの変形とも考えられる。

柱痕は遺存していたものが多く、第1・2・4・6・7号掘立柱建物跡で検出した。太さは径15～35cmを測り、20cm大のものが最も多い。柱痕を検出できなかった柱穴は、特に柱を抜いた痕跡が認められなかった。

建物跡の向きは、長軸を主軸として計測した。南北方向に主軸をとるのは第1・6・8・10号掘立柱建物跡の4棟、東西方向に主軸をとるのは残りの6棟である。南北方向を向く4棟は主軸の向きが10度以内に、東西方向に向く6棟は8度以内におさまっており、規則性が高い建物配置であることが窺われる。

建物は同時に存在したものではなく、いくつかの時期に分けられる。重複関係では、第7・9・10号掘立柱建物跡が直接柱穴が重複し、第4・5号掘立柱建物跡と第6・8号掘立柱建物跡とも直接に柱穴の重複がないもの同時存在は配置からみて考えられない。第7・9・10号掘立柱建物跡の新旧は、10号→9号→7号の順に新しくなり、3時期にわたり建てられている。同時存在及び建物の変遷を追求するためには、出土遺物の検討を加えねばならない。また、1次調査区(注1)でも掘立柱建物跡が検出されているので、それも含めての検討が必要であろう。

遺物

本遺跡からは、須恵器環・壺・蓋・鉢・甕・碗、土師器環・甕、丸瓦、平瓦、すり鉢、内耳鍋、鉄製刀子・釘・棒・環・鉸具・鉈尾、木製柄、板碑が出土した。すり鉢・内耳鍋・板碑は掘跡との関連遺物で、他は竪穴住居跡及び掘立柱建物跡との関連遺物で奈良・平安時代に属するものである。大半は竪穴住居跡からの出土で、掘立柱建物跡からは少量しか出土していないが、5次調査区表土の遺物は、当調査区が掘立柱建物跡だけ検出したところであるため掘立柱建物跡の出土遺物とみな

しても差しつかえないと思われる。ただし、遺構は特定できない。本項は、紙数の関係上詳述できないので特徴的なものを記述する。

第1号掘立柱建物跡と2・4次調査区表土から「小山」と読める墨書土器が3点出土した。本遺跡名は、小字である「小山上」からとったもので、現在に残る地名と墨書が合致している。書体はいずれも同じであり、同一人の手によるものと思われる。

第1号住居跡からは、鉾具と鉾尾が出土した。鉾具は大型品なので馬具として使用された可能性がある。当市では初めての出土品である。

2軒の竪穴住居跡からは、瓦が多く出土した。宮ノ越遺跡でも竪穴住居跡から瓦が出土しているが、いずれも小破片となっており屋根にふいていたほどの量ではなく使用目的は明らかではない。近隣では寺院跡は確認されていないが、当遺跡から南西6kmに東金子窯跡群が所在しており、瓦を入手し易い状況にはあったものと考えられる。

5次調査区の表土から硯が出土している。前述したように掘立柱建物跡に伴うものと考えられ、墨書土器との関係から注目される。

注1 調査が重複したため遺構番号について統一がとれなかった。そこで、当市ではこの調査を1次調査と呼称する。当市の2～5次の調査では、遺構番号を連番としている。

第2節 宮ノ越遺跡

本遺跡からは、竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟を検出した。竪穴住居跡は、カマドの右脇に粘土を貼りつけた施設が検出された。この施設は、当遺跡に隣接する城ノ越遺跡の3次調査でも検出し、そこでは入口施設としたが(小淵 1985)、本遺構も同様のものであろう。

遺物は、主に竪穴住居跡から出土している。そのなかで、墨書された土器が1点あり「入間」と読める。(注1)当遺跡は、入間郡と高麗郡の境いに所在するため(注2)興味深い資料である。

注1 栃木県文化振興事業団の田無清彦氏、仲山英樹氏に御教示を得た。

注2 当地は、当初入間郡に所属していたが、年の高麗郡が入間郡内に建郡された際に当地も高麗郡となった可能性がある。(小淵 良樹)

引用・参考文献

- 小淵良樹 1983 「滝沢園遺跡」狭山市埋蔵文化財調査報告書 狭山市教育委員会
小淵良樹 1985 「城ノ越遺跡3次・上広瀬上ノ原遺跡」狭山市埋蔵文化財調査報告書 狭山市教育委員会
小淵良樹 1986 「揚徳木遺跡」狭山市埋蔵文化財調査報告書4 狭山市教育委員会
小淵良樹 1987 「今宿遺跡」狭山市埋蔵文化財調査報告書5 狭山市教育委員会
駒見和夫 1982 「宮ノ越遺跡」埼玉県遺跡調査会報告 第44集 埼玉県遺跡調査会
中村倉司 1987 「年報7」埼玉県埋蔵文化財調査事業団
坂野和信 1986 「年報6」埼玉県埋蔵文化財調査事業団
増田正博・鹿島英明・小淵良樹 1986 「狭山市史 原始・古代編」狭山市
増田正博 1978 「城ノ越遺跡」狭山市城ノ越遺跡調査会

圖 版



小山ノ上遺跡 2次調査



小山ノ上遺跡 第1号掘立柱建物跡 柱痕検出状態



小山ノ上遺跡第1号据立柱建物跡



小山ノ上遺跡第1号住居跡



小山ノ上遺跡第2号住居跡



小山ノ上遺跡第3号住居跡

図版 4



小上ノ上道跡 4 次調査区全景



小山ノ上道跡 4 次調査区全景



小山ノ上遺跡第2号掘立柱建物跡柱底検出状態



小山ノ上遺跡第2号掘立柱建物跡



小山ノ上遺跡第3号掘立柱建物跡



小山ノ上遺跡第4・5号掘立柱建物跡柱痕検出状態



小山ノ上遺跡第4・5号掘立柱建物跡
第4号住居跡



小山ノ上遺跡 5 次調査



小山ノ上遺跡 5 次調査全景



小山ノ上遺跡第6号獨立柱建物跡柱底検出状態



小山ノ上遺跡第6号獨立柱建物跡



小山ノ上遺跡第7号孤立柱建物跡



小山ノ上遺跡第8号孤立柱建物跡



小山ノ上遺跡第9・10号獨立柱建物跡



小山ノ上遺跡第9・10号獨立柱建物跡



小上ノ上道跡 堀跡調査状況



小山ノ上道跡 堀跡



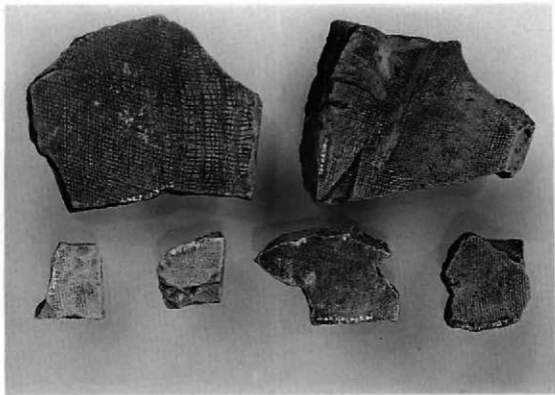
小山ノ上遺跡 築石



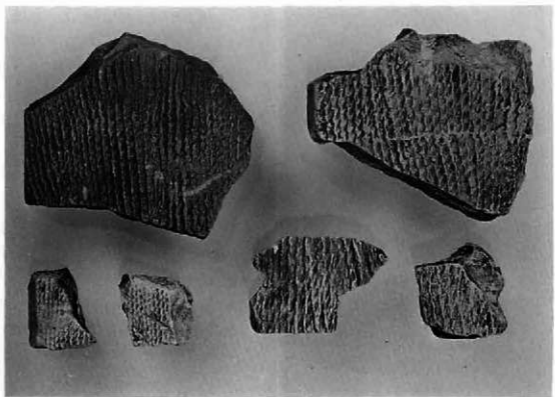
第1号住居跡

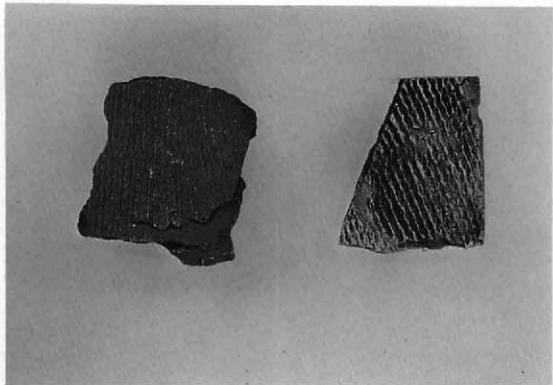


第1号住居跡



第1号住居跡 出土瓦 ◆





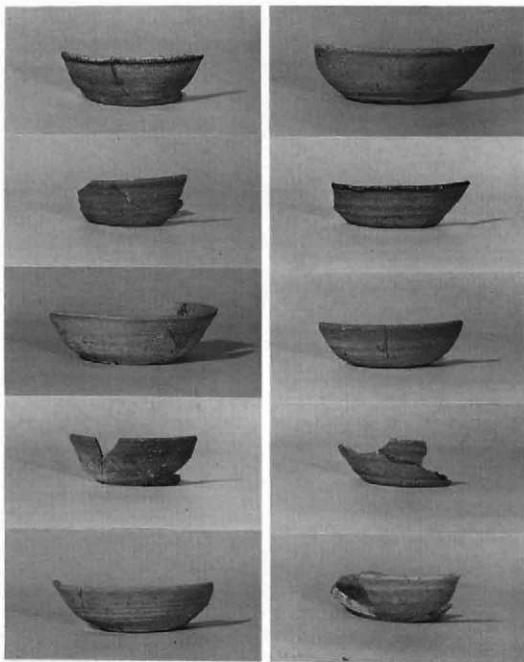
第1号住居跡出土瓦



第2号住居跡 14 第2号住居跡 15

第2号住居跡 16 第2号住居跡 17

第2号住居跡 19



第2号住居跡 2

第2号住居跡 4

第2号住居跡 6

第2号住居跡 8

第2号住居跡 11

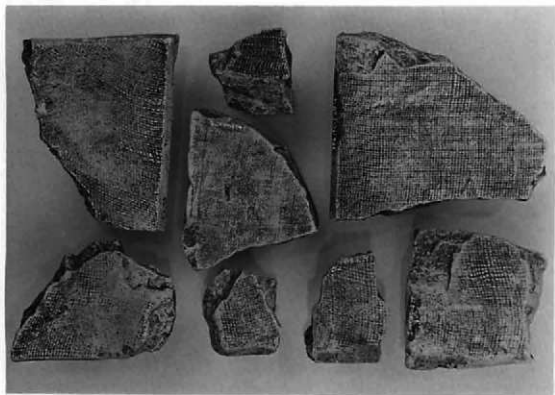
第2号住居跡 3

第2号住居跡 5

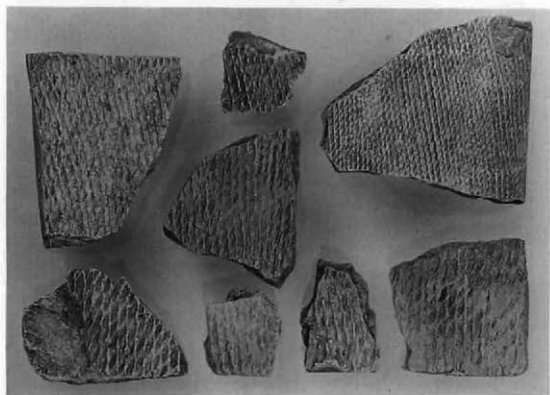
第2号住居跡 7

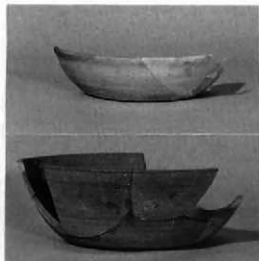
第2号住居跡 10

第2号住居跡 12

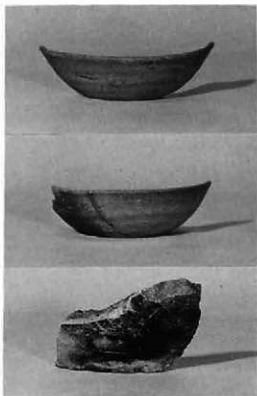


第2号住居跡 出土瓦 ◆





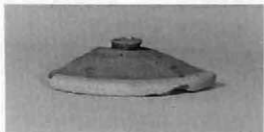
第3号住居跡 1 第3号住居跡 2
第3号住居跡 3



塚跡 4 塚跡 5
塚跡 6 塚跡 8
塚跡 13 塚跡 14



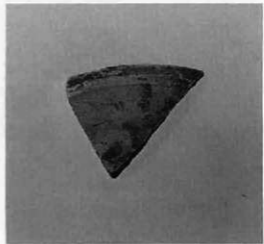
掘立柱建物跡出土遺物



5次表土 2 5次表土 5
5次表土 7 5次表土 8
5次表土 1



2次表土出土 墨書土器

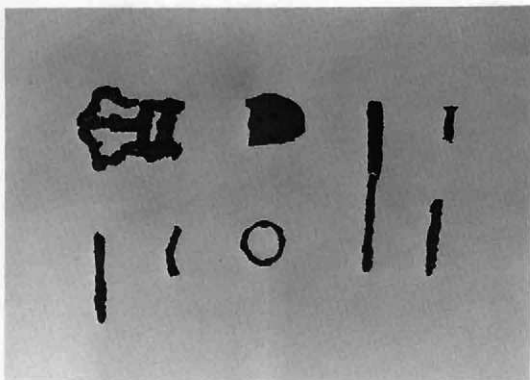


第1号掘立柱建物跡出土 墨書土器

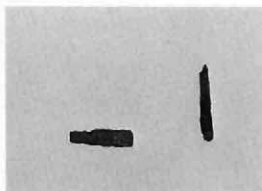


堀野出土石板





小山ノ上遺跡出土鉄製品



小山ノ上遺跡出土鉄製品



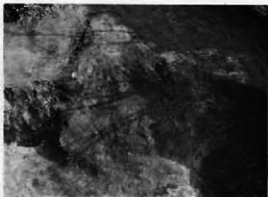
小山ノ上遺跡第1号住居跡出土木製品



宮ノ越遺跡2次調査



宮ノ越遺跡第66号住居跡



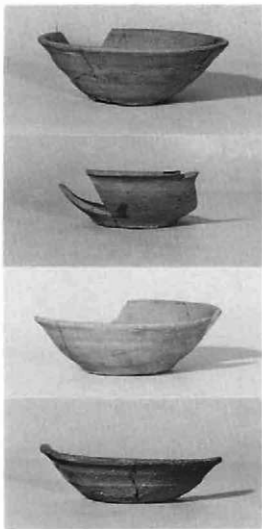
◀ 第66号住居跡カマド



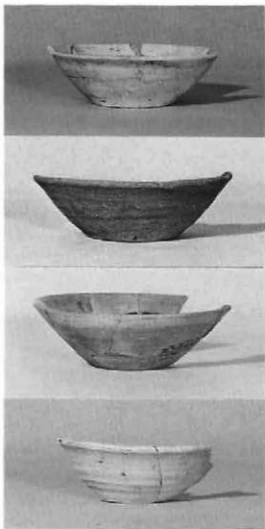
▼ 第66号住居跡入口施設



宮ノ越遺跡第19号掘立柱建物跡



第66号住居跡 1
第66号住居跡 3
第66号住居跡 5
第66号住居跡 7



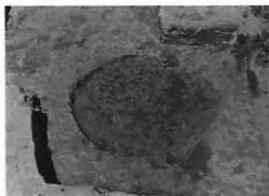
第66号住居跡 2
第66号住居跡 4
第66号住居跡 6
第66号住居跡 9



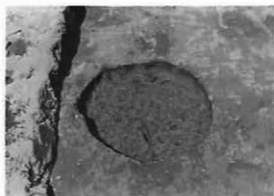
宮ノ越遺跡表土出土遺物
第66号住居跡出土黒書土器



中原遺跡



第1号土坑



第2号土坑



第3号土坑



掲植木道跡7次調査





揚植木道跡9次調査





御所の内遺跡3次調査

昭和63年3月25日 印刷

昭和63年3月30日 発行

狭山市文化財調査報告 14
狭山市埋蔵文化財調査報告書 7

発 行 埼玉県狭山市教育委員会

埼玉県狭山市入間川1-23-5

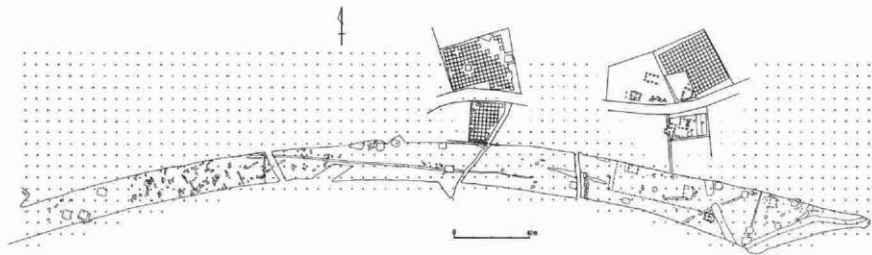
電話 0429 (53) 1111

印 刷 ミネ五十子印刷

埼玉県狭山市狭山14-8

電話 0429 (52) 2701

<付図：40%に縮小して掲載>



報告書抄録

ふ	り	が	な	こやまのうたいせき2〜5区/みやのこしいせき2区/なかほらいせき/うつがいせき7区・9区/ごじよのうらいせき3区
書	名	小山ノ上道跡2〜5次/宮ノ越道跡2次/中原道跡/獨棟木道跡7・9次/新所の内道跡3次		
副	書	名		
巻	次	筑山市民文化財報告14		
シ	リ	ーズ名 筑山市民文化財調査報告書		
シ	リ	ーズ番号 7		
著	者	氏名 小淵貞敏		
編	集	機関 埼玉縣筑山市民教育委員会		
所	在	地 平350-1380 埼玉縣筑山市民関川1-23-5		TEL.04-2953-1111
発	行	年 月 日 西暦1988 (昭和63) 年3月30日		

調査区名	所在地	コード		境界測地系		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	道跡番号	北緯	東経			
小山ノ上道跡	埼玉縣筑山市民関川 埼玉縣筑山市民関川 字表1491-8	22	11	35.87852	139.400163	19851029 ～19851129	784	個人住宅建設
	埼玉縣筑山市民関川 埼玉縣筑山市民関川 字下真木1282-3			35.87857	139.388893	19851112 ～19851217	999	個人住宅建設
	埼玉縣筑山市民関川 埼玉縣筑山市民関川 字表1491-1			35.87865	139.400044	19860502 ～19860515	780	個人住宅建設
	埼玉縣筑山市民関川 埼玉縣筑山市民関川 字小山ノ上1228-1			35.87825	139.400203	19861210 ～19870122	306	個人住宅建設
宮ノ越道跡	埼玉縣筑山市民関川 埼玉縣筑山市民関川 字宮原3658-5	22	16	35.89205	139.411237	19851218 ～19860118	330	個人住宅建設
中原道跡	埼玉縣筑山市民関川 埼玉縣筑山市民関川 字中原735	22	38	35.86563	139.421278	19850909 ～19850917	677	個人住宅建設
獨棟木道跡	埼玉縣筑山市民関川 埼玉縣筑山市民関川 字下大馬道46-11	22	27	35.87425	139.424219	19850812 ～19850819	297	個人住宅建設
	埼玉縣筑山市民関川 埼玉縣筑山市民関川 大字上奥富字平塚276-1			35.87169	139.419772	19870204 ～19870205	480	個人住宅建設
新所の内道跡	埼玉縣筑山市民関川 埼玉縣筑山市民関川 字新所の内2465-2外	22	12	35.8802	139.404727	19860111 ～19860114	165	個人住宅建設

所収道跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
小山ノ上道跡 第2次調査	集落跡	縄文・奈良・平安時代	竪立柱建物跡	1棟	須志器	黒書土器
小山ノ上道跡 第3次調査	集落跡	縄文・奈良・平安時代	住居跡 (奈・平)	3軒	須志器、土師器、瓦、 穀製品、木製品、炭化米	
小山ノ上道跡 第4次調査	集落跡	縄文・奈良・平安時代	住居跡 (奈・平) 竪立柱建物跡	1軒 4棟	須志器、土師器、穀製品	
小山ノ上道跡 第5次調査	集落跡	縄文・奈良・平安時代	竪立柱建物跡 製糖	5棟 1条	須志器、土師器、板碑	黒書土器

宮ノ越遺跡 第2次調査	集落跡	奈良・平安時代	住居跡 竪立柱礎物跡	1軒 1棟	須恵器、土師器、鉄製品	
中京遺跡 第1次調査	集落跡	縄文・奈良・平安時代	土壇	3基	なし	
掛樋木遺跡 第7次調査	集落跡	縄文・奈良・平安時代	なし		なし	
掛樋木遺跡 第9次調査	集落跡	縄文時代	なし		なし	
新所の内遺跡 第3次調査	集落跡	奈良・平安時代	なし		なし	

※「掛樋木遺跡」について、本書の読み仮名では「うつき」となっていますが、この抄録では、現在統一されている「うつぎ」と表記しました。（抄録作成：2019年3月）

【正誤表】

小山ノ上遺跡2～5次／宮ノ越遺跡2次／中原遺跡／揚楯木遺跡7・9次／
御所の内遺跡3次

(狭山市文化財調査報告14)

ページ	行	誤	正
目次	11行目	第3節	第3節
図版目次	図版1～19と図版20～28のページが逆に綴じられている。		
2ページ	11 上広瀬上ノ原遺跡	22005	22007
	46 坂上遺跡	22029	22030
	48 上中原遺跡	22089	22039
	49 中原遺跡	22025	22038
	55 台遺跡	22085	22084
12ページ	4行目	径比は。	径比は、
47ページ	7～8・11行目	脇侍	脇侍
74ページ	23行目	(空白)年	霊龜2(716)年
図版4	上側写真説明	小上ノ上遺跡	小山ノ上遺跡
図版11	上側写真説明		